
仮面ライダーディケイド 怪盗と破壊者

水城柳羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド 怪盗と破壊者

【Nコード】

N89190

【作者名】

水城柳羅

【あらすじ】

士は新しい世界に来ていた。そして別の場所で海東もこの世界に来ていた。この世界は二人が初めて出会った世界であった……。この世界で二人の間に何が起こったのか、そしてなぜ今、この世界に降り立ったのか……。ディケイドとディエンドの謎の全てを明らかにする！！

プロローグ 新しい世界へ（前書き）

世界の破壊者ディケイド。

いくつもの世界をめぐり、その瞳は何を見る？

ブログ 新しい世界へ

士達は旅を続けていた。

士の記憶を・・・土の世界を見つけるために。

勿論、夏海やユウスケ、栄次郎にキバーラといったいつものメンバーとともに。

そして、また。新しい世界に降り立っていた。

今回の世界も。特に何も起こらずに平穏に終わる・・・そう考えていた。

しかし・・・そうはいかなかった・・・。

この世界・・・そこまで甘くなかったのである・・・。

これがわかるのはもう少し先の出来事ではあるのだが。

夏海「ここは何の世界なんでしょうか。」

士「さあな。服も特に特徴はないしな。」

ユウスケ「今回はコスプレないのか・・・。」

士「コスプレっていうな。」

今まで士たちが新しい世界へと降り立つたびに、土の格好は彼らのネタとなっていた。

彼らがこれまで回った世界で印象に残っている格好と言えば・・・なんなのだろう。

やはりリーゼントにピンクの道着であろうか・・・。パンチがあった格好だと思う。

しかし、今回は特に普通の格好である。ただ・・・土の心の中には何かがつめいているような・・・そんな感覚に陥っていた・・・。そしてなんとなく・・・彼はこの世界に見覚えがあった・・・。

――
士達がこの世界に降り立っていた時、海東もまたこの世界に来ていた。
そして気づいた。

海東「この世界・・・来たことあるような気がする・・・。」

そして彼は思い出した。この世界のこと、そして過去に何があったのかということも。

そのとき彼はニヤリと笑った・・・そしてこうつぶやいた。

海東「きつと君もこの世界に降り立ってるよね・・・士。」

T o b e C o n t i n u e ...

ブログ 新しい世界へ（後書き）

さて、はじまりました。「怪盗と破壊者」です。

ディケイド本編でも気になっていたことを

ここで全て勝手に明らかにしちゃおう！と。（爆
で、第二弾はディケイドとディエンドの関係性です。

なぜ、ブレイドの世界で二人が出会ったとき、

海東は土のことを知っていたのか。とか。

なので・・・書いてみました。

これからがんばりますので、またよろしく願いします！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第一話 世界の現状、そして野望（前書き）

この物語の士は弱いっす。

いつもうじうじしてます。

でも、やる時はやる奴です。

その分海東が物凄くかっこいいです。

士にとって海東はHEROみたいな・・・

そんな存在になっていきそうです。

第一話 世界の現状、そして野望

夏海とユウスケはこの世界のことを調べていた。
なぜここに土が入っていないのかというところ・・・

夏海「土くん大丈夫でしょうか・・・。」

ユウスケ「あいつが頭痛いつて・・・明日は雪でも降るか？」

夏海「もう！ユウスケも心配してくださいよ！！」

ユウスケ「あ、笑いのツボだけは勘弁・・・！！」

この世界に来てから、土は頭痛に悩まされていたのである。
そのせいでこの世界について調べるのは夏海とユウスケの二人となつたのだ。

光夏海の祖父である栄次郎は土の看病をしていた。

栄次郎「土くん、大丈夫かい？」

土「じいさんか・・・。ああ・・・なんとかな・・・っ・・・！」

栄次郎「おやおや。まだ休んでおいたほうがよさそうだね。きっと疲れているんだよ。ゆっくり休んで。」

土「（くっそ・・・、どんどん痛くなってくる・・・。）」
なぜこんなにも痛むのか。この世界に來た時から、何か違和感はある。

そしてこの世界に來た時に・・・見覚えがあるような。そんな感じもしていた。

土「はあ・・・、なんだっていうんだ。」

海東はこの世界のいろいろな場所を出歩いていて、
そして、ある場所で彼の足が止まる。

海東「・・・ここは、確か・・・。」

士と海東が初めて会った場所だった。
海東は懐かしい気持ちになっていた。

海東「・・・ふつ。君は覚えていないだろうけどね・・・。」

海東はちらりと視線を崖の下に向けた。

そこにはきよるきよるしている夏海とユウスケの姿が見えた。
そこに士がいないことに、海東は何も言わなかった。というより、
わかりきっているというような表情をしていた。

海東「それより・・・前来た時はもう少し活気があったはずなのに。
町に人の姿がほとんど見えない・・・。なぜだ？」

海東「・・・そうか。もしかすると・・・!」

海東は『ある場所』へと走り出した・・・。

ここは大シヨッカー基地。
玉座には大首領が座っている・・・。
その近くには地獄大使が立っていた。

地獄大使「大首領様……。ディケイドとディエンドがこの世界に集まったそうです……。」

大首領「……そうか……。 (ニヤツ) 」

地獄大使「どうしましょう……。 」

大首領「まあまだ泳がせとけ。それに……。ディケイドはまだ何も覚えていないようだからな。」

彼らの前のモニターには、頭痛に苦しんでいる土の姿と走っている海東が映し出されていた。

大首領は土の方を見て、にやりと笑う。

大首領「元”大首領よ。早く思い出せ……。そしてお前の役目を果たすのだ……。」

高々と笑う大首領。そして地獄大使。ショッカーたち……。

彼らの狙いと野望とはなんなのであるうか。そしてディケイドとディエンドとの関係性とは一体……。

T o b e c o n t i n u e …

第一話 世界の現状、そして野望（後書き）

大シヨツカーの皆さん！！

隠し撮りですか？！いつの間に設置したんですか！！
って聞きたいです（笑

海東はどこへ向かっているのか。

まあ大体予想はつくでしょうね。

勿論・・・「あいっ」がいるところですよ（ニヤッ

全てを破壊し、全てを繋げ！

第二話 過去

士は深い闇の中にいた。

なぜここにいるのか、皆目見当はつかないのだが。

強烈に痛む自分の頭。そして少しずつ少しずつ・・・何かの映像が流れてきている。

この映像は一体何なんだ？なぜ自分の頭はこんなにも痛むのか・・・。

そう考えていると今度は胸まで苦しくなった。

体中が・・・重い。

この世界に来てからというものの、思うように体がついて行けていない。

士「（この世界で・・・俺はいつたい何があったんだ・・・。）」

そう思い、また彼は深い闇へと落ちて行った・・・。

次に目が覚めると、目の前には海東がいた。
それに驚いた士は、思いっきり起き上がる。

士「か、海東？！・・・っ・・・！」

海東「そう驚くなよ、士。まだ頭も痛いんだろっ？」

士「ちっ・・・。じいさんから聞いたのか？」

海東「いや、士のことは何でも分かるのさ。」

士「・・・なんだよそれ、気持ち悪い。」

海東「ひどいなー・・・せっかくこの世界についての情報を教えてあげようと思ったのに。」

士「なんだって?!」

海東は士の様子を見、ニヤツと笑った。

士は怪訝そうな目で海東を見る。

士「・・・なんだよ、その笑いは。」

海東「いや・・・、やっぱり何も思い出してないのか、と思ってね。」

士「思い出す・・・?どういう意味だ。」

海東「この世界はね・・・。」

海東「僕たちが初めて会ったところなんだよ。」

士はその言葉に呆然とした。そして混乱した。

士「・・・、俺らが初めて会ったのはブレイドの世界じゃないのか?」

海東「君の記憶上ではそうかもしれない。でも実際は違うんだよ。」

士「ちよつと・・・、ちよつと待ってくれ。じゃあ・・・、じゃあなんでまたこの世界に俺達が降り立っているんだ?一度きた世界に戻ってくることってあるのか?」

海東「今までに例はない・・・。」

士「じゃあなんだ?」

海東「大シヨツカーが僕たちを引き寄せた・・・と考えるのが妥当だろうね。」

「大シヨツカー・・・?」「引き寄せた・・・?」

士の頭の中は知らない言葉で埋め尽くされていた。
それとくる大きな痛み・・・。

士「・・・くうっ・・・！！」

海東「士・・・！！」

士「・・・うあ・・・！」

海東は苦しむ士を見て、こう言った。

海東「その痛みの謎。知りたいかい？」

士「・・・おさまるのならな・・・。」

海東「じゃあ・・・あの場所に行かないとな。」

士「・・・あの場所だと？」

海東は士がある場所へと連れ出した。

ここは・・・以前は墓地だった場所。

今はそのかけらもないほど荒れ果てていた。

士「・・・っ！」

士の頭の中にはある映像が完璧に流れ始めていた。

そのことに気付いた海東は、士の体を支えた。

士「・・・ここか？」

海東「・・・え？」

士「俺達が初めて会ったっていう場所は。」

海東は驚いた顔をして士を見た。

尚、痛みに苦しみ続ける士。

そのとき・・・海東は士と初めて出会ったころのことを思い出して
いた・・・。

T o b e c o n t i n u e ...

第二話 過去（後書き）

・・・土さん、苦しんでるだけ（爆
しばらくはこの状態が続きますかね。

次回は初めて会った時のことを中心に書きます。

世界を破壊し、世界を繋げ！

第三話 海東と土の出会いそして真実（前書き）

- ・ 海東と土の出会い
- ・ 大シヨツカーが話す真実とは

第三話 海東と士の出会いそして真実

—— KAITO SAID —

士と出会った日・・・それは雨の日だった。

傘を差していてもあまり意味のない・・・そのくらいの量。

場所は・・・墓地。今はそのかけらもないけど。

そのとき士は傘も差さずに墓石に腰をかけていた。

そのとき僕は・・・何をしていたかな。

ああ、傘を差しながらこの世界のお宝について考えていたっけ。

そういえば、ここでデイトライバーも見つけたしね・・・。

士はこつちをじつと見つめていたっけ・・・。

ああ、そこで僕は士にこう聞いたんだ。

海東「・・・僕に何か用？」

士「・・・別に。」

海東「じゃあなんでこんなところにいる？早く家に帰ったほうがいいよ。こんな雨も降ってるし。」

士「・・・わからない。」

海東「わからない？」

士「なぜここにいるのか、俺の家はどこにあるのか、何もわからない。何も覚えていない。」

海東「・・・ふーん。記憶喪失ってやつか。」

士「・・・記憶喪失・・・？」

こんな漫画みたいな展開が現実にあるんだ、とそのとき僕は思った。そしてそのときの士は、ほとんど感情というものが見られなかった。ずっと顔はうつむいていて、どんな表情をしているかがわからない。

読めない。

何を考えているのか・・・とはいっても彼には記憶がないから、何も考えることがないのかもしれないけど。

海東「何か覚えてることはないのかい？」

士「・・・自分の名前だけだ。それだけは覚えている。」

海東「へえ・・・もう会うこともないだろうけど、一応聞いておくか。」

士「・・・門矢士だ。」

海東「・・・『門矢士』ね・・・。」

このとき、僕は聞いたことがある名前だと思った。
いつどこで聞いた名前なのは、思い出せなかったのだけけれど。

それでこのときは・・・終わりだったつけ。

士はその間に少しは楽になっていたようだ。
海東はその様子にほっとしているようだった。

海東「士、もう大丈夫なのかい？」

士「ああ、なんとかな。」

???「お前らがディケイドとディエンドか？」

後方からいきなりドスの聞いた声がした。

二人は声がした方向へ振り向いた。

そこには2人の謎の男が立っていた。

士「・・・誰だ、お前は。」

??2「・・・やっぱり覚えていないようですね。」

海東「、っ！お前、士には言うな！！」

士「・・・海東・・・？どういうことだ・・・？」

??1「・・・、いうなつて言われると言いたくなるんだよなあ・・・。」

海東「それでも言うな！！」

士「どういうことなんだよ、なあ・・・！海東！！」

??2「士さん。あなたは私たち・・・大シヨツカーの大首領だつたんです。」

海東はうつむく。

そして士は驚いた顔をしていた。とともに、戸惑っていた。

いきなり大首領といわれ。そして聞いたこともない組織・・・「大シヨツカー」。

??1「今はもう別の人がいるんだけどな、ハハハ！！」

??2「うるさいですよ、キラ。」

キラ「・・・ちつ。」

海東「そして、君たちは何しに来た？」

キラ「お前からそ何でまたここに来たんだろうなあ？」

士「・・・俺は、その大首領つて奴だつたつてのはわかった。でもその大シヨツカーっていうのはなんなんだ？」

海東「全世界の敵さ。」

士「・・・敵・・・だと？」

??2「敵だなんて・・・とんでもない。世界に必要なものですよ。・・・世界を征服しなければいけないんです。我々大シヨツカーが。」

士「・・・俺は、何をしようとしていた・・・？」

海東「それは聞いてはいけない!!」

士が二人にたずねた瞬間、海東がとめる。
その様子を見て、キラはにやりと笑った。

キラ「おう、教えてやるよ。お前は全ライダーを倒す計画をしていたんだぜ。」

士「・・・全ライダーを・・・。」

海東「それ以上やめろ!!」

海東はディエンドライバーを使って、キラを撃つ。
しかし、キラは自分の手のひらでそれを受け止める。
それを見て海東は舌打ちをする。

???2「私たちが来たのはほかでもない・・・。」

海東「・・・士か。」

海東は士の前に立ち、ディエンドライバーを二人に向ける。

???2「いいえ、今日来たのは理由がありましたね。」

海東「士を倒すつもりなんだろう? お前たちの考えることは単純だからね。」

キラ「まだ大首領からそのお達しは来ていないんでな。」

海東「・・・だったらなんだっていうんだ。」

キラ「もう用は済んでるよなあ? ラガ?」

ラガ「ええ。」元「大首領の士さんに真実を伝えに來ただけです。
・・・それだけですよ。」

士「なるほどな、大体わかったぜ。お前らの意図を・・・な。」

いきなり今まで黙っていた士が声を上げた。

ラガ「ほう。それはいつたい何なんです？」

士「簡単なことだ。要するにお前らは俺が持っているディケイドライバーがほしいんじゃないのか？」

キラ・ラガ「・・・?!」

士「・・・、その様子だと当たりみたいだな。生憎だがこれは渡せないぜ？でも、その今の太首領つて奴のことも気になるな。」

海東「士・・・？何を言つて・・・。」

士「全てを破壊する存在。それがディケイド。・・・ようやく意味がわかってきたな。」

海東「・・・士！正気に戻れ!!」

士「・・・正気？海東、何熱くなってるんだ。らしくないぞ。俺は・・・その大シヨッカーをぶつつぶすつて言つてんだ。」

キラ「・・・ほう。」

ラガ「あなた一人でそんな大それたことができるのですか？ただでさえ・・・記憶との葛藤で苦しんでいるあなたが。」

ラガが言つたことに反応する士。

そしてなぜそれを知っている、というような表情をしてラガを見る士・・・。

ラガ「あなた方がこの世界にいる限り、我々から逃れることなど不可能。今この世界は全て我々大シヨッカーのアジトと化しているのです。」

士「・・・ちつ。」

ラガ「そこでひとつ提案がありましてね・・・。」
士・海東「提案だと？」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
:

第三話 海東と土の出会いそして真実（後書き）

キラモラガもオリジナルの大シヨツカー幹部たちなんですけど、海東と土の前に現れたときは、普通の人間の姿です。

戦いのときになると、姿が変わります！！

（夏の陣のときにように・・・死神博士 イカデビル みたいな）

まあ、イカデビルのように弱くはありませんが（爆それでは次回お会いしましょう。

全てを破壊し、全てを繋げ！

第四話 大シヨツカーの要求（前書き）

第三話にまとまりがない・・・と思ったので、たぶん書き直す予定です。

第四話 大ショッカーの要求

ラガ「土さん、私たちのところに来てください。」

海東「結局そいうことか。」

ラガ「ディエンドは関係ありません。」

ラガは海東を睨む。

土はただラガとキラを見つめていた。

特に何も考えず・・・ただただ見つめていた・・・。

ラガ「もともと土さんはこちら側の人間でしてね。それはディエンドもわかっているはずですが？あなたもその場面に出くわしているはずです。」

海東「そうだね・・・そのときの土に会ってるよ。」

土「そのときの・・・俺・・・？」

海東「ギラギラしてたよ。だから最初は気づかなかった。君があの時会った感情のかけらもない奴と同一人物だったって。」

海東は昔話を始めた。

———— KAITO SAID: ————

ちやうど僕はディエンドライバーを大ショッカーから奪ったところだった。

まあまだ使い方とかよくわからなかったけど、希少価値はあるかと思っ

ただそれが見つかってしまった。まあ当たり前なんだけど。

ショッカーたちが僕を追っているんな世界をうろつろしていた。

・・・僕はそういうふうに使っていた。そうだと勘違いしていた。でも実は違った。

士の立てた計画・・・「ライダー討伐計画」を実行するために。ライダーを倒すために世界をめぐるにいたらしい。その行き先が僕と同じだった。ただそれだけ。

その時に会った。大首領の士に。

海東「・・・あれ・・・、士？」

士「・・・誰だ？俺の名前を知っているということは・・・ライダーだな？」

海東「なんだ、忘れてるのか・・・。」

大シヨツカー幹部「お前は・・・！ディエンドライバーを盗んだ奴だな？！」

海東「あれ、バレてたんだ。」

士「・・・ということはライダーなわけだ。ライダーはすべてこの俺が倒す。」

海東「まいっちゃうな。僕は君と戦う理由なんてないんだけど。」

士「お前がライダーなら戦う理由はある！！」

「KAMEN RIDER」 士「変身！！」

「DECADE！！」

海東「へー・・・、それディエンドライバーの隣に置いてあったものだね。完成したんだ。」

幹部「大首領様と戦え！」

海東「・・・だからさ、なんでライダーを倒す必要がある？」

DCD「当たり前だ。世界を救うにはライダーを倒さなければいけないんだからな。」

海東「・・・『世界を救う』？はは！笑っちゃうな、大シヨツカーの大首領である君が・・・。世界を救うなんて。世界を『征服する』」

の間違いじゃないのか？」

DCD「黙れ!!」

「ATTACK RIDE BLAST!!」

海東「っ!」

僕は当たる寸前のところで攻撃をよけた。

海東「生身の人間を攻撃するなんて・・・それってどうなのかな。」

「KAMEN RIDE」海東「変身!」

「DEEND!!」

DED「へえ。こうやって攻撃するのかな。」

「KAMEN RIDE KICK HOPPER! PUNCH
HOPPER!」

KICK「・・・お前はいいよなあ。」

PUNCH「・・・俺たちと一緒に地獄を見ようぜ。」

DCD「ディエンドはそういう攻撃をするのか・・・!ならっ!」

「KAMEN RIDE KIVA!」

KIVA・DCD「いくぜ!」

DED「いっておいで。」

KIVA・DCD「おら!!」

KICK「グアッ!」

PUNCH「兄貴！おりゃあ！！」

KIVA-DCD「ぐはっ！！」

「FINAL KAMEN RIDE DEEND！！」

幹部「大首領！！」

DCD「くっ！！」

士を庇った幹部に攻撃が直撃し、大きな爆発が起きた。
そこには変身が解けている士とぼろぼろの大ショッカー幹部が倒れていた。

DED「大首領さんもまだ戦い慣れていないようだね。」

士「くそっ！」

DED「・・・ま、いいや。君とはまた会えそうな気がするよ。」

「ATTACK RIDE INVISIBLE！」

そこで僕たちは別れた。

次に会ったのは・・・もういつだったか覚えてないな。

海東「とまあ、こんな感じさ。」

海東が話し終わると、士は顔をこわばらせていた。

海東「あのとときの幹部はどうなったんだい？」

キラ「まだ健在だぜ。今の太首領様に仕えてる。一番の部下としてな・・・。」

海東「へえ。あんなにぼろぼろだったのに。やっぱり改造されてるから違うんだなあ。」

ラガは土に視線を移す。そして土の近くに歩み寄った。

ラガ「土さん、私たちのところに来る決心はつきましたか？」

土「・・・俺は・・・。」

土は黙っている。歯を食いしばりながら。

どうすればいいのか。自分は・・・やはり破壊者で。破壊者なら破壊者らしく・・・でも。

土「俺はお前たちのところには行かない。」

キラ「何?!」

土「第一、もう大首領って奴がいるんだろ? だったら何で俺が必要なんだ?・・・反乱分子になる可能性のほうが高いだろ。それなら俺を消すってほうが簡単じゃねえか。なのにお前らはなんでそれをしないんだ?」

ラガ「・・・それもそうですね。私たちには何も聞かされていませんから、大首領様が何を考えているのか見当もつかないのですよ。」

土「・・・それに。」

キラ「それに?」

土「俺は気楽にいるほうが性にあってるんでな」

土がにやつと笑ってキラとラガを見る。

海東はその様子にほっとした表情を見せるが、目の前の二人は顔を見合わせていた・・・。

ラガ「そうですか。残念です。ここでディケイドとディエンドの二人も失うことになるなんて。」
キラ「そうだなあ!!」

士・海東「?!」

大きな爆発音

T o b e c o n t i n u e . . .

第四話 大ショッカーの要求（後書き）

回想シーンの海東語りがうまく書けません。

もう少しがんばろうと思います。

まあ・・・その後の文も微妙なんですけどね（汗
ということ、次回もお楽しみください

世界を破壊し、世界を繋げ！

第五話 キラ・ラガVSディケイド・ディエンド（前書き）

- ・キラ&ラガVSディケイド&ディエンド
- ・鳴滝本作初登場

第五話 キラ・ラガVSディケイド・ディエンド

爆発がおさまり、そこにはディケイドとディエンドに変身した土と海東が立っていた。

彼らは爆発が起きるほんの数秒前にディケイド、ディエンドにそれぞれ変身。そして回避していた。

もしその動作のどこかで秒数がくるっていたら確実にキラの攻撃が当たっていただろう。

冷や汗をかく二人に対して、余裕の表情を見せているキラとラガ。

DED「君たちは変身しないのかい？」

キラ「お前らごとき相手に変身するほど俺は弱くねえんだよ！おるああー！！」

DCD「っ?!」

猛スピードで駆け出し、そのままディケイドを蹴り飛ばした。そしてその反動でディエンドをラガのほうへと押しやる。

キラ「ラガ、ディエンドは任せたぜ。」

ラガ「わかりました……。頼むから殺さない程度にしてくださいよ。」

キラ「お前もな。後始末めんどくせえんだからよ。」

ラガ「わかってますよ……。お互い様です。」

蹴り飛ばされたディケイド……。土は何が何だかわかっていなかった。

いつの間にかキラが自分の目の前にいて……。そしてそのまま……。

体勢を整える暇もなく、攻撃を仕掛けてくるキラに対して、防戦一方の士。

カードをドライバーに入れる暇もないのだ。

DCD「ちっ・・・！」

「ATTACK RIDE SLASH！」

キラ「無駄だあ！！！」

DCD「ぐっ・・・！！！」

士がライトブッカー（ソードモード）で攻撃を仕掛けるも、そのまま受け止められてしまった。

そして向こうは素手なのにもかかわらず、自分がおされていることに焦りを感じ始めていた。

士は自分を落착かせようと必死だった。

あのかきは、動揺して見せかけたつもりだったが、内心それどころではなかった。

自分の過去がこうも簡単に暴かれ、そして自分はライダー全員を敵に回していた、ということに聞かされ・・・。

何より、自分がその大ショッカーという組織のトップに立っていたということに驚きを隠せなかった。

その名前に聞き覚えはない。当然だ。自分には過去の記憶が全くないのだから。

しかし、海東を見ていればわかる。その組織は『悪』なんだと。

士「（やはり俺は破壊者というわけか。）」

キラ「考え事してる余裕があるなんて・・・すげえなあ！！！」

DCD「そっちこそ・・・、話してる余裕あるんだなっ！！！」

キラ「なかなかやるな。．．．だがしかし、お前はもう『俺ら』から逃げられない。」

DCD「．．．？どういうことだ．．．？」

キラ「．．．チェックメイト、だ。」

DCD「．．．ぐあああ！！！」

いきなり全身に痛みが起きた。そのまま変身がとけてしまう士．．．。

体中が熱い．．．痛い．．．。

彼の腕や脚には酷い出血をしていた．．．。

士「．．．っ．．．！！」

キラ「なぜそうなったのか教えてやろうか．．．？向こうの闘いを見ってみる。」

士が目をやると、既に戦いは終わっていた。

ぼろぼろになっている海東と無傷のラガ．．．。

ラガは自分にディエンドライバーを向けていた。

ラガ「キラは少しずつ士さんにこの糸を巻きつけていたんですよ。」

士「．．．糸．．．だと？」

キラ「この糸は簡単には切れない。そして強力だ。お前が動いてくれたからこつちもやりやすかったぜ。畏にかかるのが早かったってことだ。」

ラガ「そして最後に私が銃弾を放った、というわけです。」

士「ちっ．．．ぐあっ！！！」

キラは士の出血の酷い個所を踏みつけていた。

小さな悲鳴を上げる士。それを遠くからもがきながらも助けようとしている海東の姿も。

しかし、ラガが銃弾を放ち、そのまま崩れ落ちた。

士「か、海東?!...うあ!!」

ラガ「どうです? 私達と一緒に来る気になりましたか?」

士「な、なるわけねえだろ!!...ぐっ!!」

ラガ「...そうですか。残念ですよ。本当に残念です。」

ラガは地面をじっと見つめてにやりと笑った。

ラガ「だったらここで始末しなければいけませんね。」

士「なっ...!」

そのとき電子音が鳴った。

キラ「くそっ! いいところなのに...。ラガ、大首領様がお呼びだ。」

ラガ「...もったいないですね。ここまで追い詰めているのに...命拾いしましたね、デイケイド。でも次回はそうなるとは限りません。...またお会いしましょう。」

士「ま、待て...!」

そのままキラとラガはオーロラの中へと入って行った。

士は地面を這いつくばりながら、海東のもとへと急いだ。

士「海東...! 大丈夫か...?!」

海東「...あ、ああ。なんとかね...。士は出血がひどいな。止血しないと。」

士「こんなものほっとけば治る。それより今は...お前の...っ!」

海東「あまり動かないほうがいい。傷口がこれ以上開くと厄介だ・・
・。しかし、」

士「・・・ん？」

海東「いつまでこちらを見ているつもりだい？・・・鳴滝さん。」

士「・・・鳴滝だと？」

海東は先ほどからずっとある『視線』を感じていた。

それが鳴滝という謎の男・・・。

鳴滝「デイケイド。お前は这个世界が最後だ。」

士「鳴滝、お前いつもそれ言ってるよな。」

鳴滝「うるさい！！お前がいる限り、世界は消滅していくのだ！デイケイドの存在が！世界を消滅へと導く！！やはりお前は破壊者だ！！」

To be continue...

第五話 キラ・ラガVSディケイド・ディエンド（後書き）

この小説、なんとなく早く完結できそうな・・・

そんな感じがしています・・・（↑）

まあ根拠は全くないんですけどね！（汗）

それでは次回をお楽しみください。

第六話　ディケイドとディエンドの秘密（前書き）

この小説の大まかな流れがまとまりました。

全二十話＋エピローグ＋総括　の予定でいます。

個人的に終わり方が綺麗になればいいな、と

思っています。がんばりますので、よろしくお願いします。

そして今回は・・・急展開（爆

鳴滝が語ります！とにかく語ります！

あんなに「おのれディケイドー！！」しか

言わない人が！！語ります！！（爆

第六話　ディケイドとディエンドの秘密

鳴滝は土と海東に語りだした。

ディケイドのこと・・・ディエンドのこと。

そしてその秘密を・・・。

私はもともと大ショッカーの下で働く研究員だった。

ディケイドライバーもディエンドライバーも私とその部下達が作り上げたものだ。

ディケイドが誕生した理由。それはライダーを倒すためではなかったんだ。

我々研究員には闘う能力がない。それを少しでも強化できるように・・・！そのために作ったんだ。

幹部たちに内緒でな。

だがいつの間にかその情報が上部に漏れていた。

誰かが漏らしたに違いない・・・私はそう考えた。そしてすぐに犯人が分かった。

それがお前・・・門矢士だ。

その時のお前はまだ17くらいだった。

お前は時々我々の研究室に来ていたからな。十分その現場を見ていたはずだ。

そしてそれが当時の大首領の耳に入り、お前は即ショッカーの幹部になりやがった。

そしてそのディケイドライバーは大ショッカーの手に入ってしまった・・・。

そして我々は次の段階に入っていた……。

前に作ったものよりも性能がいい……！そういうものが作りたい。そう思っ作ったのが、ディエンドライダーだ。

しかし、作ったのはいいが誰がそれを使うか。それで揉めた。

勿論私も使いたかった……！それを使えば今まで我々をいいように使ってきた大ショッカーを懲らしめることができる……！そしてディケイドを倒すことだってできる……！

だが、そのディエンドライダーも……。門矢士が発見した。

そいつは笑ってこう言いやがった。

『お前らは大首領様にとつて犬みたいな存在だ』とな。

いいように使われる。我々のために作り上げた二つのライダーシステムはすべて我々の手元から消えてしまった……！

門矢士はそのあと少ししていなくなった。ぱったりと消息がつかめなくなった。そのあともどってきたらしいが、もうすでに私はその頃その場所にはいなかったからな。

なぜ消えたか。そんなこと私を知るはずもない。知りたくもない。顔を見るのも吐き気がするほどだ。

そしてある話が聞こえてきたのだ。

「ディエンドライダーが何者かに奪われた」とな。

いいざまだ。そしてそのまま倒されればいい。そんなことを思いながら私は大ショッカーの元から姿をくらました。

その時耳にした話が実に滑稽でな。

「ディケイドライダーの適合者が現れた。ディエンドライダーは不良品だから特に探し出す必要はない」とな。

ディケイドライダーよりも性能がいいものを！と思っ作ったはずのディエンドライダーが不良品だと……。？実に滑稽だ。そして実

に不愉快だった。

私が話せるとしたらこのくらいだ。

『ディケイドは破壊者として。ディエンドはもともと不良品だったから無意味なもの。』

そう思つて大シヨツカーが利用しようとしていたのは間違いないだろうがな。

鳴滝が話し終えたとき、土はうつむいていた。歯を食いしばりながら。

海東はディエンドライバーをくるくる回しながら話を聞いていた。

土「昔のおれは性格が曲がつてるな。」

海東「（今でも十分ひねくれてる気がするけど）」

鳴滝「私は少ししゃべりすぎだな。・・・ディケイド。やはりお前は这个世界で消滅されなければならない・・・。」

そう言うと、鳴滝はオーロラを出現させてどこかへ消えていった。

海東と土は黙っていた。

静かな、時間の流れ。

そんな空気が漂っていた時。

後方が騒がしくなっていた。

海東がそちらに目を向けると、そこには多くの怪人たちであふれかえっていた。

土「・・・大シヨツカーか。」

海東「そのようだね。」

中央には謎の仮面をかぶった男が近づいてきていた。背格好は士と似ている。オーラはまるで違うが。

海東は悟った。この男が『大首領』なのだ。

二人は大シヨッカー達に囲まれていた・・・。

大首領「やあ、元大首領とディエンドライバーを盗んだ盗人さん。」
士「・・・、じきじきにトップがお目見えか。大体その仮面はなんだ。」

大首領「ふつ。この仮面は気にするな。」

士「（いや、気にするだろ。）」

大首領「・・・さて、本題といこうか。」

士「本題だと・・・？」

怪人たちが士を取り囲む。

海東が近づこうとするが、海東の周りにも怪人があふれかえって、士に安易に近づけなくなってしまった。

海東「つ、士!!」

大首領「・・・お前をとらえに来た。」

士「なっ?!」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
:

第六話　ディケイドとディエンドの秘密（後書き）

更新が遅くなつてすみません。

先ほどテレビを見ていて衝撃的な気分になつていたので、
打つスピードが遅くなりました（↑）はい、言い訳です（爆
ていうか、夏海とユウスケが空気すぎる！（爆

しばらくずーっと空気の予感です（笑

次回も空気です（爆

その次の回には登場させたいなあ・・・。

全てを破壊し、全てを繋げ！

第七話 光栄次郎の秘密（前書き）

まあ、この人の本当の姿は皆さんもご存じのとおり、
という感じだと思っんですけどね（笑）
特に変えるようなことはありません。

第七話 光栄次郎の秘密

士は身動きが取れなくなっていた。

いつの間にか鎖で体が巻きつけられていたからだ。

士「くっ!!」

大首領「動かないほうが痛い目見なくて済むぜ。」

士「離しやがれ!!このやろ!!」

近くにいる戦闘員を蹴り飛ばすが、上半身が拘束されているためほとんど効いていないようだ。

逆に体を思い切り絞めつけられてしまう。

士「ぐあ!!」

海東「士・・・!!」

「KAMEN RIDE」海東「変身!」「DEEND!」

士の近くにいた戦闘員たちをディエンドライバーで打ち、少しでも士の近くに行こうとするが、キラとラガに周りを固められてしまった。

ラガ「すみませんね、ディエンド。今はあなたの邪魔をしている余裕はないんですよ。」

キラ「また今度やろうぜ。」

DED「待て!!士をどうするつもりなんだ?!!」

大首領「どうするつもり・・・か。頭がきれるお前ならわかりそうなものを。」

DED「まさか・・・！そんなことはさせない！士を倒すことができるのは僕だけだ！！」

「ATTACK RIDE BLAST！」

大首領「戦闘員たちよ、ディエンドの足止めをしておけ。キラ、ラガ、ガミ。行くぞ。」

キラ・ラガ・ガミ「」「御意。」「」

DED「ま、待て！！」

大首領たちは士を連れ、オーロラの中へ消えてしまった。

DED「くそっ・・・！！・・・っ！」

戦闘員「イー！！！！（ディエンド覚悟ー！！）」

DED「『イー！！』うるさいな。これで終わらせる！！！」

「FINAL ATTACK RIDE DEEND！！」

海東は必殺技を決め、戦闘員たちを蹴散らした。

変身を解除する海東・・・。

海東「・・・僕はどうすればいい？士を救う方法は・・・あるのか？」

大シヨッカー基地。

戦闘員・怪人が囲んでいる人物は、柱にくくられていた。

その男は勿論門矢士、仮面ライダーディケイドである。

そしてその男の目の前にいる謎の男は、土を見下ろしていた。そしてニヤツと笑う。

そのまま土の腹を蹴った。

土「ぐはっ！！！」

??「いい加減起きろ。元大首領よ。」

土「ごほっ！！！」

いきなり蹴られた衝撃で、息ができなかった土は咳き込んでいる。苦しみなながら、周りを見渡していると目の前の男の姿が土の目に入る。

土「・・・?!じ、じいさん?!」

目の前には光栄次郎そっくりの白髪で長髪の黒マントの男が立っていた。

??「私は死神博士。」

土「し、死神博士・・・?」

死神博士「そうだ。お前を大首領様のもとへと連れて行く。キラ！ラガ！連れて行け！」

土「ちょ、ちょっと待てよ！あんたは大シヨッカーだったってことか？だとしたら、俺を写真館に連れて来たのも・・・?」

死神博士「なんのことだ？私は死神博士である！！！」

キラとラガは柱につながれている鎖だけを取り、土を大首領のもとへ連れて行った・・・。

そしてこの後。

土は衝撃の事実を知ることとなる・・・。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
:

第七話 光栄次郎の秘密（後書き）

海東ってやっぱり土のこと大好きですよー

あ、変な意味じゃありませんよ？（爆

仲間として、です！！

彼も素直じゃないので、なかなか言わないですけど。
土と海東は似た者同士、ってことですよねー・・・。
ではまた次回お会いしましょう。

世界を破壊し、世界を繋げ！

第八話 大首領の姿、海東の決意（前書き）

うまいこととまらないですが、

個人的に第八話そして次の第九話は好きです（爆

皆さんも好きだと言ってもらえるようなものが

かけていればいいのですが・・・どうでしょう（汗

第八話 大首領の姿、海東の決意

士はキラとラガに引つ張られながら、大首領の部屋へと連れてかれていた。

その間、士はずっとうつむいていた。

先ほど遭ったことを。考え込んでいた……。

士「（……くそっ）」

キラ「何をそんなにイラついてるんだ？」

士「……うるさい。」

キラ「ま、いいけどよ……。」

ラガ「大首領様。連れてきました。」

大首領「通せ。」

士は大首領の部屋に足を踏み入れた。その瞬間なんとなく思い出し
てきた。

この部屋の感じ。変わってない……と。

大首領は士に背を向けていた。

そして士は気付く。この間のような仮面をしていない……。

仮面は机の上に置いてあった。一体なぜ……？

そう考えていると、大首領が士の方を向いた。

士が顔をあげて大首領を見ると……絶句した。

大首領「……どうした。その顔は。」

士「……お前……！」

大首領「……私はお前。お前は私だ。ディケイドライバーを持つ
者は『門矢士』と決まっているからな。私はそうやって作られた。」

士「っ、作られただど？どういうことだ。」

大首領「ああ、安心しろ。お前は作られたわけではない。」

士は混乱を隠せない。

先ほどの光栄次郎の姿を見たときから・・・いや、もしかしたら鳴滝の話聞いたときからかもしれない。

混乱、そして戸惑い。

いくつもの感情が士の心を支配していた。

士「・・・俺をここに連れてきて何をするつもりなんだ？」

大首領「・・・犬だ。」

士「・・・犬・・・だど？」

大首領「お前は自分が言ったことも忘れたのか。」

士「・・・っ?!」

大首領「お前はこれから大シヨツカーの『犬』となるのだ・・・ライダー達が来るまでの間、な・・・おい、キラ。そいつをこの柱に縛れ。」

士「くっ！」

大首領「安心しろ。変なことはしない。私にそんな趣味はないしなあ。」

士「ふざけるな!!」

大首領「なあに。別に大したことでもない。お前も見えてきただろう？研究員たちの姿を。それと同じだ。」

士はキラに一発腹を蹴られると、そのまま意識を手放した・・・。

海東は光写真館へと急いでいた。

勿論土のことを夏海とユウスケに伝えるため……。

夏海「あれ、大樹さん？あの……土くんとおじいちゃん知りませんか？」

ユウスケ「つて、海東！どうした？ぼろぼろだぞ……？」

海東「僕のことはどうでもいい……。君たちはこの世界のことを知っているかい？」

ユウスケ「よくはわからないけど、あまりいい世界とは言えないな。」

夏海「私たち以外に人を見なかったんですね。」

海東「ああ。ここは大シヨツカーによつて支配された世界だかね。」

夏海・ユウスケ「大シヨツカー??」

海東「ああ。詳しく話している余裕はない。簡潔に話すと……土が大シヨツカーに捕まった。」

夏海・ユウスケ「?!」

海東は今までのいきさつを簡単に二人に話した。

ユウスケ「……土が大シヨツカーの元大首領……。」

夏海「今はその大シヨツカーに捕まってるってことですか……？」

海東「ああ。……僕もうかつだった。近くにいたのに……！」

ユウスケ「海東のせいじゃない！そんなに大勢いたんだ……。俺がいても助けられたかどうか……。」

夏海「じゃあ……。どうするんですか……。？土くんは……。どうなっちゃうんですか……。」

夏海は瞳に涙を浮かべている。

ユウスケもこぶしに力を込めている。海東はうつむいたまま。

夏海「大樹さん……。話してください。土くんはこれからどうな

るんですか？」

海東「それは僕にもわからない。でも殺したりは絶対にしない。」

ユウスケ「なんでだよ。そんなのわからないじゃないか！」

海東「今は話せない……。でも殺すことは絶対にない。それだけは信じてくれ。」

夏海「……。理由は話せないってことですか……。」

海東「ああ。僕も詳しくはわからないんだけど。」

夏海はこの世界に来てからの土の様子を思い出していた。

夏海「（頭が痛いと言っていた。それは土くんの過去が思い出されていたから……。？だとしたら。記憶が戻っているってこと……。）」

土にはこんな過去があつて。いきなり思い出したから今はきつと戸惑ってるはず……。

早く助けないと……。今の土を長いこと一人にさせておくべきじゃない……。

そう考えるが、どうすればいいのかもでてこない……。

ユウスケ「……。仲間を集めればいいんじゃないのか？」

海東「仲間？」

ユウスケ「ワタルとか……。カズマとかさ。全員が集まればきつと土を助けることだってできると思うんだ。」

夏海「タクミくんやショウイチさん、ソウジさん。」

海東「……。少年くん。」

海東は決意する。

『土が消える』ことは二の次だ。まずは大ショッカーを倒す……と。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
:

第八話 大首領の姿、海東の決意（後書き）

いや・・・あの・・・すみません（爆）

別に大首領さんSMプレイが好きなのではなく。

『犬』と表現したのも、まあ・・・その前からの伏線ですし。

そっちの方向には絶対に行かないので安心してくださいね。

そういうお話にはなりません（爆）

ただ殴られる・蹴られるなどはありませんが・・・

てか会話多いなあ・・・（爆）

あ、ユウスケ達の会話に「辰巳シンジ」がないのは、

タイムベントの関係で知らないから、です（↑）

でも登場させますよ。ええ。

世界を破壊し、世界を繋げ！

第九話 消滅の謎、それが運命（前書き）

なんだか内容がダーク寄り。

そんな感じで書き始めたものではないんですけど・・・

まあなるべく軽くなるように頑張ります（笑

でも、酷い表現はありません。ご安心を。

というかそんなの私を書けませんわ（笑

（オースOP曲聴きながら執筆したものです↑）

第九話 消滅の謎、それが運命

蹴られた腹が痛む・・・

そんなことを思いながら目を覚ました士。

縛られている腕も限界に近い・・・。

ディケイドライバーもどこかへ奪われてしまったようだ。

士「（絶体絶命というわけか。）」

大首領「よく眠れたか？」

士「・・・、全然だ。誰のせいだと思ってる。」

大首領「さあ、誰だろうなあ。」

士「ちっ・・・！」

大首領「何を苛々してる？」

士「俺と同じ顔でニヤニヤされると誰だって苛々してくるだろう。」

大首領「お望みなら仮面を被るが・・・どうする？（ニヤッ）」

士「・・・っ・・・。」

とつさに目をそらしてしまう。

そして士は思った。

自分も目の前にいる人間のような表情をしていたのだろうか、と。

そういう表情を鳴滝に、大シヨツカーの奴らに見せていたのか、と。

多分・・・いや、きっとそうだったんだろう。

今の大首領は・・・『俺』なのだから。

その『俺』がしているのなら、昔の「俺」も当然・・・。

そう思っていると悔しくなってきた。

自分の過去をこんな形で知ることになったのも少しだけ悔しい。

大首領「悔しいか？」

士「・・・なっ・・・?!」

大首領「こんな形で自分の過去を知ることになって。そしてその過去が最低なものだったってことも含めて・・・な。」

士「べ、別に悔しくない。」

大首領「言っただろう。俺はお前だ。お前が考えてることも全てわかる。」

士「なんだと?!」

大首領「そして・・・同じ人間が出くわしたとき・・・。」

士「別にドツペルゲンガーじゃねえんだから、殺し合ったりはしねえだろ。」（即答）

大首領「・・・つまらんな。もう少しのつてくれたっていいのに。」

士「お前が俺だっていうなら、俺の性格くらいわかってるだろうが。」

大首領「そ、それもそうだな・・・。」

大首領はひとつ咳払いをすると、士に顔を近づけていた。

士「・・・な、な、な・・・?!」

大首領「ふっ。やっぱりお前は面白い。」

士「・・・な、何なんだよ・・・。何がしたい・・・。」

大首領「何がしたい、か。ただ破壊したい。俺はそれだけだ。」

士「・・・（そのまんまじゃねえか）」

大首領「でもな、破壊するときにお前まで破壊しそうで怖いんだよなあ。」

士「・・・なんで怖いんだ？」

士は意外そうな顔をして大首領を見た。

こんな奴にも怖いものがあるというのか、と。

大首領はその士の表情を見た途端、鼻で笑う。

大首領「ふっ！お前は何か勘違いしているようだ。」

士「何をだよ。」

大首領「……『お前が消えれば俺も消える。そして俺が消えればお前も消える』。ただそれだけのことだ。」

士「な、なんだって……?!」

大首領「だからお前は俺を倒せない。そして俺もお前を倒せない。だから破壊者デイクイドは消えない運命なのだ。」

士「……お前もデイクイドなのか。」

大首領「当たり前だろ？俺の名前も『士』だからな。」

士「そ、そんなことより……。消えるってどういうことだよ……。」

大首領「そのまんまの意味だ。」

士「……、具体的に……。」

大首領「何動揺してるんだ、お前。」

士「ど、動揺なんか……。」

大首領「してるだろう？肩が揺れた。そう言う表情をしている。お前が心の中でそう思っている。」

図星。

士は動揺していた。それも大きく。

『消える』。要するにこの世からいなくなる、ということだろう。だがなぜ両方とも消えるのか。その真相が知りたかった。

だが言葉が出てこない。余りにも動揺しすぎて。混乱しすぎて。

大首領「……少し頭を休ませとけ。」

そう言うと、大首領は士のもとから去って行った。

大首領が去った後、士は気持ちを落ち着かせようとしていた。

士「・・・ちつ。俺らしくないな。」

そんな士の姿をじっと見つめる男がいた。
士はなんとなくその視線に気づいていた。というより、いつも感じている視線だからだ。

士「今度は何の用だ、鳴滝。」

鳴滝は陰からのそつと出てきた・・・。

T o b e c o n t i n u e ...

第九話 消滅の謎、それが運命（後書き）

少しだけコミカルな部分を付け足してみた（笑）
ここがなかったらひたすら重い話になってしまう・・・！
と思ったので、急ぎよ追加・・・（汗）

これは水城の個人的な考えからなんですが、
士のような記憶喪失の人が、いきなり自分の過去の話をされたら
誰だって戸惑うだろうし混乱すると思うんですよ。

もし私が士の立場ならそうだろうと思いますし・・・。
まあなったことないから憶測でしかないのですが・・・。

それに士の場合は特殊ですからね・・・

いきなり「お前は大シヨツカーの大首領だった」って言われたら
誰だって混乱するでしょうよ。

いきなり「お前は消える」みたいなこと言われたら、
誰だって動揺するでしょうよ。

・・・あ、言い訳に聞こえますよね、ごめんなさい・・・；

あ、後書きが長くなってしまいました。

全てを破壊し、全てを繋げ！

第十話 運命と覚悟 仲間って何だ（前書き）

なんていうか・・・

鳴滝っているかわいそうなキャラクターですよ（↑）

本編でも結局ふわっとした感じでしたし・・・設定が。

まあディケイド自体設定がふわっとしてるんですけどね（それ言ったらおしまい）

まあ第十話です。結構重要な話になりそう。そして登場人物たくさんいます。

がんばって追いついてくださいよ…私もごちゃごちゃにならないように頑張りますが。

またソウジの扱いに困る・・・とりあえずクロックアップの世界から抜け出している、って考えてください・・・すみません。

第十話 運命と覚悟 仲間って何だ

人は皆、誰かを頼って生きている。

一人で生きていく！と決めていたとしても、やはりその人も誰かを頼っている。（だろう）

士もその一人のような気がする。

きつと大首領時代は一人だった。記憶をなくしたときも。全て、何もかも失ったときも。彼はずっと一人だった。一人でいい、仲間など必要ない。そんな風に思っていただろう。でも今はどうだろうか。

今の士の周りには夏海がいて、ユウスケがいて、栄次郎がいて、キバールがいる。そしてたまに海東が邪魔しに来て。

他の世界のライダー達の仲間もできた。彼はもう一人じゃない・・・。

そしてそれはつまり。

一人で生きていけなくなっている、ということにもつながる。

それをずばっと指摘したのが・・・。

士の目の前にいる鳴滝だった。

鳴滝「お前はもう一人ではない。しかしそれはつまり一人で生きていけなくなった。誰かを頼らなければいけなくなった。ということだ。」

士「一体何が言いたいんだ・・・！」

鳴滝「今のお前の心情を代弁したまでだ。」

士「っ・・・！」

鳴滝「ディケイド。お前は・・・もう誰かがいなければ何もできない人間になったということだ。・・・仲間など必要ない。そう言っていたお前が懐かしいな。」

士「うるさい。黙れ！」

鳴滝「お前の仲間とやらが動き出してるぞ。」

士「・・・！」

鳴滝「・・・いいのか？大シヨツカーを倒しても？」

士「・・・大シヨツカーは倒されなければいけない・・・！」

鳴滝「・・・お前が消えても、か？」

士「・・・それは・・・！」

鳴滝「どうせお前はどうかいっても消える運命にある。それだけを忘れるな。」

そう言つと鳴滝は自分から発生させたオーロラの中へと消えていった。

海東たちはライダーたちを集めていた。

最初に来たのはシンジだった。が、タイムベントの関係で誰も覚えていない。

ユウスケ「・・・え？」

シンジ「（あ、そつか。タイムベントで・・・。）辰巳シンジといします。龍騎です。」

ユウスケ「ああ！龍騎の世界つて来てすぐ帰ったから会ってないんだ！小野寺ユウスケです！クウガです！初めましてー！」

自己紹介をしていると、続々とほかのライダーたちも集まってきていた。

夏海はその対応に追われていた。

夏海「皆さん。来てくれてありがとうございます！」

シヨウイチ「門矢が大変なことになっていると聞いて、仕事を抜け

出してきたんだが・・・。」

夏海「詳細は奥でお話します！」

ソウジ「ここが写真館か。」

夏海「ソ、ソウジさん?!なんでここに?!」

ソウジ「なぜかクロックアップの世界から抜け出せたんだ。・・・なぜだろう。」

ワタルはカズマと気まずそうにしながらも、近くにいたアスムと談笑していた。

タクミはもうすでに奥にいた。

海東「とりあえず今から話すことをよく聞いてくれ。・・・一大事なんだ。」

海東の真剣な表情を見て、一同に緊張が走る。

そして海東はこれまで起きたことを説明した・・・。

この世界は大シヨッカーによって支配されているということ、この世界は土の過去が大きくかわっているということ、そして土がその大シヨッカーに捕らえられてしまったこと。

カズマ「まさか・・・チーズ、・・・土が?!」

海東「ああ。僕の力不足だった。」

ユウスケ「海東は悪くない。今から俺たちが救いに行けばいいんだ。その大シヨッカーつてのも倒してさ!」

海東「・・・それも・・・そうなんだけど。」

海東は言葉を濁す。

それに気づいたシヨウイチは問いただそうとしたが、ソウジに寸止めされた。

シヨウイチ「何するんだ」

ソウジ「今は彼の話をすべて聞くことが先決じゃないのか？」

シヨウイチ「それも・・・そうだな。」

ソウジ「海東くん、続けてくれ。」

海東「・・・ああ。それで・・・まずは土を助けることが先決だと思う。きっと大ショッカーは僕たちが来ることをあらかじめ読んでいるはずだ。だからなるべく固まって行動したほうがいいと思うんだけど・・・。」

ユウスケ「それもそれで危険・・・ってことか。」

海東「そう。でもわかれたらわかれたで、大変かもしれない。特に・・・キラとラガっていう幹部は厄介だ。あいつらの強さは尋常じゃない。」

ライダーたちは必死にどうすれば効率よく進むかを考えていた。

夏海はその空気に入ることができないでいた。

夏海「（私も土君を救いたい。でも私には力がない・・・。）」

自分には土を救えるだけの技量がない。だから難しい。

自分は待っていることしかできないのが、とてつもなく悔しいし・・・つらい。

カズマ「とりあえずその大ショッカーって奴らの基地に向かえばいいだろ。そこで今後の動きを考えればいい。」

海東「しかし・・・それは。」

カズマ「最大の目的は土を取り戻すことだ。そうだろ？」

シンジ「きつとデイクイドライバーも奪われてると思う。もともとは大ショッカーのものなんだろう？」

ユウスケ「・・・そうだな！海東！ここで考えてても埒が明かない！さっさと行こうぜ！！」

海東は苦笑いしながらも、準備をしに外へ出た。
ほかのライダーたちも同様に・・・。

夏海「私も一緒に行かせてください!!!」

夏海のこの言葉に全員の足が止まる。

ユウスケ「夏海ちゃん……。夏海ちゃんをそんな危険な場所に連れて行くわけには行かないよ……。」

夏海「どうしてですか?! 私は……。私は……。土君を。」

海東「ナツメロン。気持ちはわかるけど、僕たちは僕たちだけで精一杯だ。君がピンチになっても救えるかどうかかわからない。それでも行くというのかい?」

夏海「それは……。!」

海東「……。自分の身は自分で守ってもらわないと。それが約束できないのなら連れて行くことはできない。」

夏海「私は……。」

夏海は言葉に詰まる。

ユウスケ「夏海ちゃん。俺達絶対士を連れ戻して帰ってくるからさ! あ、あと大ショッカーって奴らもちやんとつぶしてからだけど……。だから安心して? ね?」

ユウスケが夏海を引き留めようと必死で問いかける。
だが夏海は頑固として引き下がろうとしなかった。

夏海「我儘だつて言われてもいいです。でも待つてるだけなんて……。そんなの私耐えられません。自分の身は自分で守ります!!! だから……。! だから連れてってください……。!」

夏海は涙を流しながらライダー達に訴えるのだった……。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
:

第十話 運命と覚悟 仲間って何だ（後書き）

あら、久々に長いですね（笑

今回の入り面白くないですか？（↑）少し狙ったんですけど（↑）

いやいや、まあそこは置いておくとして・・・。

ただ鳴滝は土を、デイケイドを消滅させたいだけなんですよね

だからいつも土に対していろいろ試していたと。そういうわけです。

今回はどうなるんでしょうねー

・・・鳴滝がクウキになる確率・・・80%だけど大丈夫かな（爆

ではまた次回お会いしましょう。

世界を破壊し、世界を繋げ！

第十一話 苦戦（前書き）

個人的にすごくすごく時間をかけた第十一話。

なんていうか、内容が濃くてそれも多いう。

自分的には微妙な出来になりそうな予感大だけど（笑
それでは第十一話お楽しみください。

第十一話 苦戦

夏海は必死で訴えていた。

夏海「確かに私は無力です。足手まといで・・・いたら迷惑だつてこともわかってます。わがままだつて承知で言ってます。でも待つてるだけなんて・・・そんなの私耐えられません・・・！自分の身は自分で守ります！！だから・・・！だから連れてってください・・・！土くんのもとに・・・。お願いします・・・。お願いします・・・。お願い・・・。」

シヨウイチ「だがなあ・・・。」

シヨウイチはあまりいい顔はしていなかった。
他のライダー達も。

生身の人間を、それも土の大事な人をそんな危険な場所に連れていくことを。

だがこの男だけは違った。

海東大樹。誰よりも土のことをわかっていて・・・そして夏海のこととも。

海東「やれやれ・・・。ナツメロンも土と似てきたね。頑固なところこそつくりだ。」

夏海「ナツミカン・・・っていうか夏海です！」

海東「・・・これから危険なことも、とんでもないことも起こると思う。それでも行くかい？全部受け止めることができるかい？」

海東が意味深なことを言う。

しかし夏海はそのことには特に気にも留めなかった。

自分がその場所へ行けるなら・・・という気持ちが強いからだ。

夏海「大樹さん……。ありがとうございます！」

ユウスケ「ったく、しょうがねえなあ……。夏海ちゃん、そういうところは土に似なくていいのに。」

夏海「そんなに私土くんに似てますかねえ……。」

しかし周りのライダー達はやはりあまりいい顔をしていない。特にシヨウイチ。

彼は『大事な人が危険な目に遭わないように』、一度その大事な人の前から姿を消したことがあった。

もし……。もし自分が士の立場だったらどう思うだろう。

自分なら怒るかもしれない。何でこんな危険な場所に来たんだ……と。

でも士はどうだろう……。見当がつかない。

ソウジ「まあ仕方ない。彼女はきっと引き下がらないだろうな。俺

たちがどんなに止めても無駄かもしれない。」

カズマ「それもそうだな。」

夏海「ありがとうございます！みなさん。」

夏海は一人だけ顔をしかめているシヨウイチを見た。

夏海「シヨウイチさん……。あの……。私……。」

シヨウイチ「……。勝手にしろ。」

夏海「……。すみません。絶対に邪魔になるようなことだけはしませんから！」

こうして海東たちは大ショッカーアジトへと向かった……。

縛られている腕がもう限界に達していた。

顔色も悪い。

もともとしばらく寝られていない生活を送っていたためか、精神的にもきつくなってきた。

士「（鳴滝は『お前はどうかいても消える運命にある。』と言った。・・・なぜだ？俺が消えるのは・・・どちらか一方が倒されたときだけじゃないって言うのかよ。ったく・・・鳴滝の野郎、肝心なところはいつも言わねえんだな・・・。）」

もう内心どうでもよくなってきているのかもしれない。

自分がどうなるかと。結局自分は『破壊者』に変わりないのだから破壊者として・・・自らも破壊する。この世界も。

けれども。きつと夏海やユウスケはどう思うだろうか・・・こんなことを知られてしまったら・・・あいつらは・・・俺を止めるだろうか。

とめたところで何かが変わるとか・・・そんなものではないと思う。結局自分は消えるのだから。

士「・・・こんなに重いこと考えていても意味ねえな・・・。」

士はため息をひとつついて、そのまま天井を見上げた・・・。

そのころ、海東たちは大ショッカーのアジトに到着していた。

ユウスケ「な、なんだよ、あれ・・・!!」

ユウスケが見たものは、入り口の前にうじゃうじゃといる大ショツカーたちだった。

海東はキラとラガの姿を確認して、

海東「油断するな。幹部級のやつもいる。」

カズマ「よっしゃ！強ければ強いほど戦いたくなるって！行こうぜ！！」

アスム「まずはその幹部以外の戦闘員たちを倒してから行きましょう！そのほうがいいと思います！」

タクミ「そうですね・・・。」

シヨウイチ「お前ら、体力が持つようにセーブしろよ？」

カズマ「わかつてる！！」

シヨウイチ「ほんとかよ・・・。」

大ショツカー側もライダーたちに気がついたようだ。
そしてキラとラガも。

キラ「きたか。ライダー軍団。」

ラガ「ここから先は通すわけには行きません。」

ユウスケ「跡でじっくり遊んでやるから待ってるよ！！海東！行こうぜ！！」

海東「ああ。」

「Standby」

「KAMEN RIDE」

キバット「キバツていくぜー！」

ライダー『変身！！！！』

「DEEND！」

「COMPLETE」

夏海はなるべく迷惑がかからないような位置に移動した。

ライダーたちは戦闘員を難なく倒し、キラとラガに近寄った。

剣「後はお前らだけだぜ!!」

DED「油断するな。あいつらは……。とてつもなく強い。」

キラ「なかなかやるな……。でもな、お前らはここで俺たちに倒される!!」

クウガ「そんなのわからねえだろ!!」

DED「小野寺くん!あわてるな……。!」

海東が止めるのも聞かず、そのまま突っ込んでいくユウスケ。
その拳はキラの体に当たることなく……。そのまま吹き飛ばされた。

クウガ「うわああ!!」

キバ「ユウスケ!!!」

カブト「何が起きたんだ?!」

ラガ「簡単なことですよ……。ただ風を送っただけですから。」

アギト「風を送っただけだと?!どういうこった!!」

555「僕たちは近づくこともできないってことですか……。?!」

響鬼「わあああ!!!」

剣「うわあ!!!」

DED「少年君?!」

キバ「カズマ!!!」

キラと戦っていた響鬼と剣が海東とワタルの足元にとんできた。
ラガは楽しそうにクウガ、カブト、アギトと戦っていた。

DED「……。くっ……。!どうすればいいんだ……。!」

ワタルもキラの元に駆け寄り戦い始める。
タクミもふらつきながらも・・・シンジも必死になって戦っていた。
そして全員息があがっていた・・・。

キラ「つまらねえな。もう終わりかよ。」

剣「ま、まだまだだぜ・・・！」

ラガ「もうあきらめたらどうですか？」

響鬼「諦めません・・・！！」

ソウジはクロックアップを使えずにいた。

もし使えば・・・クロックアップの世界に取り残されてしまうかもしれないからだ。

異世界で使うとそれなりの代償があるだろう・・・そう考えていた。
ショウイチはどうすれば効率よく進むかを考えていた。

二手に分かれる、といっても、この二人を倒すことは難しいかもしれない。

どうすれば・・・！

そんなときキラ達が焦りだす。

海東は気付く。大首領にでも呼ばれたんだろう。

DED「今のうちに行くぞ！」

剣「お、おう！！」

キラ「あ、待ちやがれ！！」

555「バジン！つないどいて！！」

この場をバジンに任せ、アジトの中に突っ込むライダー達と夏海。
夏海はユウスケに守られながら中へと入って行った。
しかしそこにも戦闘員たちが待ち受けている。

響鬼「師匠！！ここはいくつかに分かれて行動して方がいいと思います！」

DED「そうだね。士のディケイドライバーはきっとこの奥にあるはずだ。そこまで道のりは長くないから人数は少なくても大丈夫だと思う。ここは結構多いから人数も多いほうがいいな。」

剣「じゃあここは俺たちに任せろ！ユウスケ達はち、士を探しに行ったほうがいいんじゃないか？」

カブト「そうだな。芦川。ディケイドライバーは俺達を探しに行こう。」

アギト「ああ。ここは頼んだぜ。」

龍騎「了解！」

ソウジとショウイチはディケイドライバーを探しに、ユウスケ・海東・夏海は士を探しに、シンジ、タクミ、カズマ、アスム、ワタルはここにいる戦闘員を倒すことにした。

戦いはまだ始まったばかり・・・

T o b e c o n t i n u e . . .

第十一話 苦戦（後書き）

長いなあ。

終盤に向かうにつれて微妙な出来に・・・
もっと精進します

全てを破壊し、全てを繋げ！

第十二話 決断そして迷い（前書き）

久しぶりの更新、失礼します。

第十二話は海東と土しか出ません。
またしても他の方たちクウキです。

第十二話 決断そして迷い

海東は先ほどから夏海達と離れて行動していた。

今後の話をするときに、まだ二人には話すべきではないことがあるからだ。

士を大切な仲間だと豪語している二人には……。まだ早いと海東は思っていた。

海東「……?!」

海東が目を見開かせた。

それもそのはず、目の前には柱に縛り付けられている士の姿があったからだ。

海東「つ、士……!」

士はぐったりとしていた。

気を失っているだけだと思いつつも少しだけ動揺を見せる海東。体を少し揺らすと、士が目を開けた。

海東「士……。」

士「……か、海東……。?何でお前がここに……。」

海東「助けにきてあげたのさ。まずかったかい?」

士「まずくはねえが……。お前一人できたのか……?」

海東「まさか……。僕が自ら士を助けに行くなんて……。柄でもない。」

士「ま、それもそうだ。」

海東はこれからのことを話せずにいた。

士を縛っている縄を解きながら、考え込む。

海東「（このことを話していいのか……。きっと士は知らないはずだ。今、情緒不安定になったら……。これからまずいことになる……。どうしたものか。）」

士「……。海東。」

海東「……。なんだい、士。」

士「俺が今から話すことを黙って聞いててくれ。口を挟むな。いいな？」

海東「……。ああ。」

TSUKASA SAID

俺が大首領と会ったときに聞いた話だ。

大首領は俺と同じ顔をしていて、俺と同じ名前を名乗っていた。

「門矢士」。ディケイドライダーから作られた、とかおかしいことを言っていた。

あと……。じいさんそっくりの……。死神博士って呼ばれてたな。そいつが近くにいた。

大首領はこんなことも言っていた。

『お前が消えたら俺も消える。俺が消えたらお前も消える。』つてな。

海東「……。なっ!？」

黙って聞いている、って言っただろ？

俺はそのときは動揺したし混乱した。

いきなり消えるって言われたら・・・な。

だが大シヨツカーは倒さなければいけない。それは確実に果たさなければいけない。

世界を救う方法が俺とそいつが消えるだけでいいのなら・・・。

俺はそうする。

俺があいつを倒す。

・・・海東。お前は俺のことは気にせずに、あいつを倒してくれればいい。

・・・それだけだ。俺が言いたいのは。

海東は驚きを隠せなかった。

士はまだこれからのことを知らないと思ったからだ。

海東「・・・士。」

士「・・・どうした？」

海東「僕はその話を知っている。」

士「・・・俺が消える、ってことか？」

海東「ああ。・・・士をここで失うわけにはいかない。」

士「何を言われても俺はあいつを倒すぞ。」

海東「大シヨツカーは倒さなければいけない・・・。それは僕にもわかる！でも・・・士が消える理由はどこにもない。このことを夏メロン達に知られたらどうするんだ？」

士「・・・それは・・・。」

しかし士の決断は揺らぐことがなかった。曲げなかった。

士は海東の顔をまっすぐ見つめた。

士「それでも俺は・・・世界を救わなければいけないんだ。」

海東「・・・そうか。土に迷いはないんだね。」

士「・・・ああ。俺がいなくなった後の夏みかんたちを頼んだぜ。」

夏海「・・・いなくなったらってどういうことですか・・・?!」

士・海東「・・・?!」

T o b e c o n t i n u e ...

第十二話 決断そして迷い（後書き）

久々の更新です。

なんていうのか・・・短くてすみません（↑）
大事な話だったんだけどな・・・orz
文章能力が低くてごめんなさい・・・><;
それでは次回をお楽しみに

世界を破壊し、世界を繋げ！

第十三話 究極の決断そしてラストバトルへ（前書き）

夏海に話を聞かれてしまいました。

はたして彼らの運命はいかに・・・（↑）

はい、ふざけてすみません。

この話もラストに向けての大事な話なので、
しっかり書いたんですが・・・どうでしょう。
それでは第十三話お楽しみください。

第十三話 究極の決断そしてラストバトルへ

海東と士は驚いた。

今の話を夏海に聞かれていたのだ。

海東「・・・夏メロン・・・。どこから聞いていたんだい？」

夏海「士くんがいなくなるってところから・・・です。」

海東「そうか。（ということは消えるということとは聞いていないな）」

夏海「どういことですか？説明してください！」

士は黙っている。

今から話すことを・・・彼女に話してもいいのか。

止められるのは分かっている。だが話さなければいけない。

士は心の中で葛藤していた。

海東「士。夏メロンに話さないと後から痛い目見るよ。（小声）」

士「・・・だよな。（小声）」

夏海「士くん・・・！」

士「わかった。話す。」

ユウスケ「あ、夏海ちゃん・・・！ここにいたのか・・・！」

海東「・・・。小野寺君。もう少し空気を読めるようにしてくれないかな。」

ユウスケ「・・・え？・・・つ、士！・・・！」

士「・・・はあ。もういい。全員そろってから話す。」

ユウスケ「え、おい！どういことだよ・・・！！！」

海東「・・・これからのことだよ。」

ユウスケ「・・・これからのこと・・・？」

ほかのライダー達も海東の招集で集まってきた。
ソウジとショウイチは士のディケイドライバーを奪還することに成
功し、士にそれを返した。

士「・・・集まったか？」

カズマ「チーズ！！！！無事？！無事か？！」

士「・・・カズマ・・・うるさい。それからチーフだ！何度いった
らわかる・・・というか、もう俺はお前のチーフじゃない！」

カズマ「いいじゃないかー！ああ・・・！久しぶりだなあ・・・！」

カズマが士とじゃれている。

その周りにはほかのライダーたちが集まっていた。

夏海の表情は沈んだまま、ユウスケはそわそわしていた。

海東はその再会のムードを壊すような発言をした・・・。

海東「悪いけど、再会を喜んでいる暇はないんだ。な？士。」

士「そうだ。今から俺が話すことは冗談じゃない。すべて真実だ。」
ワタル「これから、のことですね。」

士「・・・そう。これからの戦い方、そしてその終わり。俺が知っ
ていることすべてをお前らに話す。」

こうして士は話し始めた。

この世界に来たときのこと、この世界の現状、この世界の士の関係
性。

大ショッカーと士の関係性、今の首領のこと・・・。

最後に。自分たちがしなければいけないことを。

アスム「要するに・・・。ここにいる大ショッカーを壊滅させるこ
と。これが僕たちの役目ってことですね？」

士「簡単に言えばな。」

シヨウイチ「そうすれば世界は救われる・・・ってことなのか？大首領って奴を倒せばいいのか？」

士は一番大切なことをまだ話していない。

夏海もそのことについて知りたかった。

『士が消える』・・・この真実を。

夏海「士君・・・。肝心のことが何もわかりません。士君がいなくなるって・・・消えるってどういうことなんですか？！」

夏海の発言に言葉を失うライダーたち。

ユウスケ「・・・士、それ・・・どういうことだよ。」

士「そのままの意味だ。」

ソウジ「もう少し説明が必要だな。」

タクミ「士さん・・・！」

海東が話そうとするのを士が引き止める。
驚いた顔をした海東を士は見つめた。

士「ここは俺がきちんと話す。」

海東「・・・そうか。」

士「大首領は俺と同じデイクイドだ。」

ユウスケ「それってつまり・・・。」

士「・・・『破壊者』・・・ってことだな・・・。」

夏海「士君は破壊者なんかじゃありません・・・！」

士「この世界を救うにはデイクイドを倒さなければいけない・・・らしい。だから俺は大首領を倒す。」

ユウスケ「・・・士はどうなるんだ・・・？これが・・・士が消え

ることにどうつながるんだよ・・・！」

カズマ「そうだよ！！馬鹿な俺にもわかる説明をしてくれ！！」

士は覚悟を決めたときのことを思い出していた。

士「（そうだ。俺は何を迷っているんだ・・・。世界を救う方法がこれしかないのなら・・・。やるしかないだろう・・・！）」

士「俺が大首領。どちらかが倒されたとき、その倒されなかったほうも消える運命にある。」

ユウスケ「・・・それって・・・まさか。」

士「消滅するってことだ。」

ユウスケ「・・・なっ・・・！！！」

士「もう俺は決めたんだ・・・。俺はいつか消える運命にある。だつたら今この世界であいつを倒すしかない。今やるしかないんだ・・・！！」

そして。

士たちの最後の決戦が始まろうとしていた。

To be continue...

第十三話 究極の決断そしてラストバトルへ（後書き）

・・・思ったよりも描写がおかしくなりました（↑）
もう少し頑張らないとなあ・・・といつも思っています。

次回はとにかくバトルバトル・・・orz

戦いの描写があまりにも下手すぎて、

いつも迷惑をかけています・・・

もっともつと精進しなくては・・・！

それでは次回をお楽しみに！

世界を破壊し、世界を繋げ！

第十四話 VS大ショッカーへ！（前書き）

お久しぶりです。

最近なかなか更新できなくてすみません。
今週は頑張ります！

第十四話 VS大ショッカーへ！

海東達は大ショッカーのアジトに潜入しようと作戦を立てていた。

海東「向こうは明らかにこちらより数が多い。体力を減らしていく作戦だと思う。」

シヨウイチ「だとすると・・・。」

カズマ「俺たちは不利ってことか・・・?!」

海東「だけど一気に倒せる方法だってある。少年くんの鬼火とか音撃棒とか使えば。」

アスム「やります！師匠！」

ワタル「・・・やはり大首領や幹部と闘うまでにどれだけ体力が残っているか、が問題になりそうですね。」

ソウジ「あのラガって奴は相当キレそうだから・・・。」

タクミ「大首領もどんな技を使ってくるのか・・・。」

シンジ「それは土と同じディケイドなんじゃないかなって思います。」

「

シヨウイチ「・・・厄介だな。」

海東「とにかくやるしかない。大首領のことはとりあえず後回しだ。・・・考えたくもない。」

シヨウイチ「・・・そうだな。」

シヨウイチはきつとこの中で誰よりも辛いのが海東なのではないかと考えていた。

彼は土の過去を知っている。そしてこれから起こることもわかっていたのだろう。

だからこそ。だからこそこの世界を早く抜け出さなければいけない。そう思っていたんだろう、と。

それはソウジも気づいていた。いや、ここにいる誰もが。

『士を失いたくない。』

そう思っているのだから……。

ワタル「そういえば士さんは？」

海東「夏メロン達という。」

ワタル「……ユウスケ……。士さん……。夏海さん……。」

ユウスケはまだ士が言ったことを信じる事ができなかった。

いきなり「消える」と言われて、そう簡単に「はい、そうですか。」など言えるわけがない。

なのに……。

なのになぜ士はそうしてられる？

自分のことなのに。何の迷いもなく大首領を倒すと言えるのか……。

ユウスケ「なんでだよ。」

士「……何がだ。」

ユウスケ「なんでお前は一人で何でも決めるんだよ。」

士「俺自身のことだからだ。当たり前だろうが。」

ユウスケ「……それは違う。だって俺ら仲間だろ？」

士「……。」

ユウスケ「一緒に旅をしてきて……。一緒に戦ってきた仲間だろ……。？」

士「ユウスケ……。」

ユウスケ「もう嫌なんだ。大切な人を失うのは……。」

士「……！」

ユウスケは自分の世界で大切な人を失った。
その悲しみは深かった。だけど士がいたから。仲間がいたから立ち直ることができた。

ユウスケ「・・・夏海ちゃんの笑顔も失いたくないんだ。」

ユウスケは夏海を見ながらこう言った。

夏海は泣いている。

士と旅をしてきたことで彼女にも素晴らしい笑顔が見えるようになった、と栄次郎が言っていた。

士との旅のおかげだ、と。

夏海「・・・土くん・・・どうしてもするんですか？」

士「・・・ああ。こうするしか世界を救う方法はない。」

夏海「世界を・・・救う・・・。」

士「それが俺の役目だったはずだろ？ だったら俺がやるしかない。俺の力で終わらせる。」

夏海は悟った。

ああ、もう彼は覚悟を決めているのだ、と。
自分たちが何を言っても聞かないな、と

ユウスケ「それがお前の役目・・・？」

士「ああ。まだ旅を始める前に、謎の男に言われたんだ。世界を救えってな。」

夏海「それが土くんの役目なら・・・。私は何も言えません・・・。」

ユウスケ「夏海ちゃん?!」

夏海「でも・・・!まだ土くんが消えるとかは思いたくないんです・・・!消えてほしくないんです・・・。」

ユウスケ「・・・それは俺も同じだ、士！」
士「・・・ったく。しょうがねえ奴らだな。」

海東「士、そろそろいいかい？」

士「ああ。大丈夫だ。」

ユウスケ「夏海ちゃんは・・・」

夏海「ついていきます！！一緒に行かせてください・・・！」

士「・・・俺の傍から離れるなよ。夏みかん！」

夏海「夏みかんじゃありません！夏海です！！笑いのツボしますよ？！」

士「そ、それだけは勘弁してくれ・・・！」

こうして士達は大ショッカーのアジトへと乗り込んでいった・・・。

To be continue...

第十四話 VS大ショッカーへ！（後書き）

次回から本格的な戦闘シーンがスタートします。

大首領も変身しますよー！お楽しみに！

・・・文章は危ないと思いますが（↑）

それではまた次回お会いしましょう！

世界を破壊し、世界を繋げ！

第十五話 仮面ライダーダークデイクイド（前書き）

書いててだんだん訳が分からなくなりました（↑）
やっぱり戦闘シーンは苦手です…

第十五話 仮面ライダーダークデイクイド

士たちは大ショッカー基地の中へと潜入していた。
ショッカー戦闘員は何人が既に倒していた。

アギト「まだ雑魚ばかりだな」

キバ「そうですね。向こうも様子見つてところでしょうか…」

DED「いや…むしろ逆だろうな」

響鬼「逆？どういうことですか、師匠！」

DCD「つまりこれはただの序ノ口だってことだろ！」

士が発した瞬間、怪人たちが襲いかかってきた。

「ATTACK RIDE SLASH!!」

士はライトブッカーをソードモードにして戦っている。
そして海東はライダーを召喚して戦っていた。

DED「雑魚な君達にはこいつらがお似合いかな。」

「KAMEN RIDE KICK HOPPER」

「KAMEN RIDE PUNCHI HOPPER」

「KAMEN RIDE OHJA」

「KAMEN RIDE IXA」

DED「さて、行っておいで。」

クウガ「超変身！」

ユウスケはタイタンフォームへと姿を変えた。

タイタンフォームはパワーがアップするフォームである。

剣を使って怪人たちを倒している。

しかし、数は一向に減った試しがなかった。

クウガ「くっそ！きりがない！」

DCD「ユウスケ！いつものいくぞ！」

クウガ「ちょ！いつものってまさかと思うけどさあ……」

「FINAL FORM RIDE KUUGA!!」

DCD「ちよつとくすぐつたいぞ！」

クウガ「やっぱり……」

「FINAL ATTACK RIDE KUUGA!!」

クウガはクウガゴウラムへと姿を変え、近くにいた怪人たちを蹴散らしていたのだった……。

「ソードベント！」

シンジは戦いに慣れていなかった。

それは彼らと違い、ライダー裁判が行われ、その裁判する側には選ばれなければ仮面ライダーになることができないからだ。

そのため彼の戦い方が一番荒く、一番危なかった。

それにいち早く気付いたのがカズマだった。

剣「おい！お前危なっかしいぞ！」

龍騎「すみません…。戦いに慣れていなくて…」

剣「でもお前はライダーだろ？」

龍騎「俺の世界は少し複雑なんです。」

剣「なんかよくわかんないけど…。とりあえず俺と一緒に戦おうぜ！」

龍騎「お願いします！」

ワタルはタクミ・アスムと戦っていた。

目の前にはたくさんのファンガイア。

ワタルの世界は人間とファンガイアの共存を推奨していた。

ワタルはこの世界の王で、規則を守らないファンガイアを始末してきた。

キバ「お前たちも道を外した者たちだ。王である僕が倒す！」

キバット「ワタル、一気に決めるぜ！ウェイクアップ！」

辺りが真っ暗となり、月が見える。

ファンガイアは逃げることもできず、そのままキバの必殺技を受けて、消滅した。

アスムは鍛えているので、タクミの援護をしながら自分に向かってくる怪人たちを蹴散らしていた。

555「すみません」

響鬼「大丈夫ですよ。仲間なんですから！」

555「僕がもつと強かったらいいんですけど…」

響鬼「気にしないでください。それに僕は鍛えてますから、大丈夫です！」

DCD「タクミ！行くぞ！」

555「え？な、なんですか？！」

「FINAL FORM RIDE FIZE!!」

DCD「ちょっとくすぐりたいぞ！」

555「あっ！」

ファイズはファイズブラスターへと姿を変えた。

「FINAL ATTACK RIDE FIZE!!」

怪人たちに向けて放ち、爆発が起きた…。

――

ソウジはクロックアップを使えないため、カブトクナイガンで蹴散らしていた。

ショウイチもまた、攻撃を繰り返していた。

そしてだんだん他のライダー達も集まってきた。

DCD「だいぶ減ったな。」

DED「先へ急ごう！」

アギト「ちょっと待て！あれを見ろ！」

ショウイチが指をさした方向を向く。

そこにはキラ、ラガ、そして大首領が立っていた…。

DCD「大首領…。」

カブト「あれが…か。気味が悪い仮面を被っているな。」

555「夢に出てきそうで怖いですね。」

剣「…お前らそんなこと言ってる場合じゃないだろうが…。」

大首領は士たちの元に降り立つ。

そして指を一回鳴らすと、大爆発が起きた。

龍騎「うわっ！」

DCD「シンジ！大丈夫か？！」

龍騎「…な、なんとか…。」

士は気付く。

大首領の腰に自分と似たようなバツクルが巻かれていることを。

そして自分のものとは若干違う…そんな感じもしていた。

大首領「…士。よく来たな。」

DCD「お前らをぶつつぶすためにな！」

大首領「ほう…。自分が消えてまで世界を救いたいと思うのか。滑稽な話だな。」

DCD「滑稽だと思われても別に構わねえ。だがお前らを野放しにしていく訳にもいかないんでな。」

大首領「ならば仕方ない。お前らはここが死に場所だ。キラ、ラガ。変身しろ。」

キラ・ラガ「…御意」

キラとラガはそれぞれ変身し、その近くには死神博士、地獄大使もいた。

夏海「…まさか…おじいちゃん…?!」

DCD「気にするな、夏みかん！別人だ…！」

夏海「でも…。」

DCD「…それより…。お前は変身しないのか？大首領…！」

士は大首領に指を向ける。

ニヤリと笑ってバツクルに手を置いた。

「K A M E N R I D E D A R K D E C A D E ! !」

ディケイドのときの音よりも低い音を出したダークディケイド…。
それが大首領の真の姿である。

D・DCD「さあ、ショータイムの始まりだ！」

T o b e c o n t i n u e …

第十五話 仮面ライダーダークディケイド（後書き）

やっぱり長くなります。

そしてとうとう仮面ライダーダークディケイドが登場！

もう残りも少ないので、頑張っていけますよ！

今日はもう1話更新できるといいなあ。

世界を破壊し、世界を繋げ！

第十六話 ダークディケイドの力（前書き）

今回は大ショッカー幹部たちと戦います。

キラ、ラガ、地獄大使、死神博士、そしてダークディケイド。
戦いの描写は苦手ですが、頑張ります！

第十六話　ダークディケイドの力

カズマは自分と似ていそうなキラと対峙していた。その隣にはシンジがいる。
きっと奴の攻撃は自分と同じで単純なんだろう。そういう顔をして

向こうはきつと戦いに慣れていないシンジに攻撃を集中させるつもりだろう。

剣「だがそんなことはさせないぜ!!」
キラ「何をぶつぶつ言ってるんだ?!」

「KICK THUNDER MACH!!」
「ライティングソニック!」
「ソードベント!」

剣・龍騎「おりゃあああ!!」

しかし二人の攻撃はキラに当たることはなかった。
そのままこの攻撃が彼らに跳ね返されてしまう。

剣「うあっ!!」

龍騎「・・・っ・・・!」

キラ「なんだ。威勢がいいのは最初だけか。」

剣「くっそお!!!!」

龍騎「っ、強い・・・!!」

カズマは自分の頭をフル回転させながら、何かいい方法はないか考

えていた。

だが考えるだけ無駄と考えたのか、また一気に突っ込んでいこうとする。

それを必死に止めるシンジ。

龍騎「だめだ！むやみに突っ込んだら危ない！」

剣「じゃあどうすればいいんだよ！！俺馬鹿だからこういう戦い方しかできないんだ！」

龍騎「・・・それは・・・。」

キラ「おいおい。こないんなら俺からいつちやうぜ。」

キラは近くにあった石ころを手に取りそれに力をこめ始めた。

剣「おいおい。あいつ俺らをなめてるのか？」

龍騎「いや、何かある。」

剣「何かって何だよ！」

龍騎「とりあえず・・・危ないってことだけだ！」

剣「ま、まじかよ！！！」

そして石ころだったものは相当大きな岩になっていた。

剣「おいおいおいおい！！それはないだろー。」

キラはそのままシンジのほうへと投げてきた。

それに気づいたカズマだが、間に合わない。シンジも逃げ切れない。そう思った瞬間、カズマは思い出す。そして1枚のカードを取り出した。

「TIME」

そのままカズマはシンジに向かってきていた岩をキラの方向へと蹴り飛ばした。

ワタル・アスム・タクミはラガと対峙していた。

冷や汗をかいているのがタクミ。ラガの異様な感じが。自分と似ているような。そんな感じがしていたからだ。

ワタルとアスムは自分と違って強い。でもこの異様な感じがわかるのはきつと自分だけだ。

そう思ったタクミはワタルとアスムの前に出た。

キバ「タクミさん?!」

響鬼「どうしたんですか?!」

555「ちよつと、ラガさんに聞きたいことがあるんです。」

ラガ「・・・なんででしょう。」

555「・・・あなたはもともとオルフェノクですよね。」

そうタクミが発した瞬間、反応を示したラガ。

それに気づいたタクミは続ける。

555「やっぱり・・・。僕と同じような感じがしたから。」

ラガ「ファイズということはあなたもオルフェノク・・・。私はあ

なたとは違うファイズによって1度消滅しました。」

555「僕とは違うファイズ・・・?」

どういうことだろう。

ファイズは2人いるのだろうか。

タクミが頭をかしげていると、ラガは仮面の下でにやりと笑った。

ラガ「今度は私がファイズを倒す番ですよ。」

響鬼「タクミさん！危ない！！」

555「・・・?!」

タクミが気づいたときにはラガの攻撃は目の前に来ていた。

しかし、その攻撃はタクミに当たることにはなかった。

アスムが音撃棒によって跳ね返したのである。

555「アスムくん・・・ありがとう・・・。」

響鬼「いえいえ。気をつけてください。この人、ちょっと変です。」

555「オルフェノクだから・・・。」

キバ「でもタクミさんだってオルフェノクですよ。ならそれが理由、ではないと思います。」

555「・・・え?」

キバ「今僕たちの目の前にいる相手は、大ショッカーによって改造されています。だからその時点で変なんですよ。」

響鬼「タクミさんは大丈夫です。僕たちと一緒に戦いましょう。そして倒しましょう。」

555「・・・うん。」

ラガ「・・・仮面ライダー響鬼。なかなかやりますね。」

響鬼「鍛えていますから。」

ラガ「・・・そんな口がたたけるのも今のうちですよ・・・。」

ラガはニヤリと笑い、次の攻撃態勢に入った・・・。

地獄大使と死神博士はあせっていた。

もちろんライダーたちに対して、である。

お互い違う場所で戦っているのだが、考えていることは同じのよう

だ。

地獄・死神「なんでこいつらが我々のところに来ているのだ!!」

「

それもそのはず、メンバーは戦い慣れているアギトとカブトが地獄大使に、クウガとディエンドが死神博士についているからだ。

地獄大使も死神博士もきつと自分たちにつくのは555や龍騎の戦い慣れていない、または自分に自信がないようなライダーが来ると思っていた。

地獄大使「・・・くそっ!」

アギト「もう終わりか・・・つまらないな。」

カブト「終わらせるとするか。」

「1, 2, 3, RIDER KICK!!」

死神博士「わ、私を倒すつもりか?!!」

クウガ「当たり前だろ! そうしないと栄次郎さんが帰ってこないんだから!」

DED「きつとガイアメモリがぶっ挿してあるんだろう。それさえ抜ければOKさ。」

「FINAL ATTACK RIDE DEEND!!」

士は大首領の攻撃に翻弄されていた。

何かのカードをさしたらそのカードが無効になってしまう・・・その繰り返し。

DCD「くそ・・・！」

D・DCD「お前はここで終わりなのだ。」

DCD「俺を倒したらお前も消えるんだろう？それでもいいのか？」

D・DCD「再起不能にするだけよ。ディケイドの力も使えなくなるくらい・・・な。」

士はキラたちの戦いが目に入っていた。

そこには倒れこんでいるカズマとシンジの姿があった。

それを見、イラつく士。

D・DCD「何をいらいらしている。」

DCD「うるさい、黙れ！」

「KAMEN RIDE KIVA GARURU!!」

KIVA・DCD「おりゃあ!!」

D・DCD「無駄だといっている！」

「FREEZE!!」

キバフォームだった士・・・ディケイドだが、フリーズによって動きが止まってしまう。

DCD「またか・・・。ちくしょう・・・!!」

D・DCD「いい加減覚えたらどうだ？」

DCD「そのカードは永遠に使えるってことかよ・・・。」

D・DCD「使いたいと思えば使える。それがダークディケイドの力だ。」

DCD「意味がわからないな。」

D・D・C・D「わからなくて結構。お前はここで再起不能となるのだから。」

キラVS剣・龍騎。

ラガVSキバ・響鬼・555。

地獄大使VSカブト・アギト。

死神博士VSディエンド・クウガ。

そしてディケイドVSダークディケイド。

彼らの戦いはまだまだ始まったばかりである・・・。

T o b e c o n t i n u e …

第十六話 ダークディケイドの力（後書き）

頑張りましたよ！

一日2話更新！！

戦闘シーンは書き始めたらすーっと進んでいきますが、書き始めるまでが大変なんです。

なかなか進んでいかないので・・・。

次回はキラ・ラガ側に変化があります。

そしてユウスケが動き出します・・・。

世界を破壊し、世界を繋げ！

第十七話 究極の闇（前書き）

キラ・・・

今までありがとうございました・・・（↑）

今回でキラとお別れです。

次回にはもうラガとお別れ・・・ああ！はやい！

それでは第十七話お楽しみください。

第十七話 究極の闇

地獄大使と死神博士を倒したアギト、カブト、クウガ、ディエンドはキラ、ラガと闘っているカズマたちのところへ急いでいた。

しかし、戦況はいいものではなかった。

キラが放った岩はTIMEによって免れたが、その岩は簡単に殴り壊されてしまっていた。

剣「くっそ！なんていうバカ力だ！！！」

カブト「助太刀だ。」

龍騎「そっちは終わりましたか？」

アギト「軽い腕慣らし程度だったな。」

ラガの攻撃は響鬼によって回避されたが、それでもまだ向こうのほうが有利。

クウガ「ワタル！アスム！タクミ！」

キバ「ユウスケー！」

DED「どうだい、こっちは。」

響鬼「師匠……。僕たちのほうよりも土さんの援護は……。」「

DED「土は一人で戦いたいはずだ。だから僕は何もできないさ。」

海東も本当は土のほうへ行きたかった。

しかしそれはできない。

土は自分が倒すと言った。勿論勝ち目があるとも思えない。

ダークディケイドの力は並大抵のものではない。翻弄され、そして負ける。

今の土の身体でも……。体力的に長期戦となれば勝ち目はない。

それでも援護に行かないのはやはり士のプライドをへし曲げることはできないから。

自分が士の立場でもそうしてほしくないと考えるだろうから。

ラガ「数が増えても同じです。」

クウガ「それはやってみなきゃわからないだろ！」

DED「もつとも……。向こうの戦況はこちらに傾いているしね。」

ラガ「……。?!」

ラガは驚いた顔をして、キラ達が戦っている方向を見た。

一目瞭然だった。

今まで押していたはずのキラが押されている。

2人増えただけなのに。

DED「もうすぐ向こうの闘いは終わる。そのあとはどうするんだい？」

ラガ「キラが倒されるなんて……。そんなことはない！絶対に!!」
DED「そんな焦ってる君も足元すくわれるけど……。」

「FINAL VENT!!」

「1, 2, 3, RIDER KICK!!」

「KICK THUNDER MACH!!」 「ライティングソニック!!」

ラガ「……。キラ!!!」

ラガが叫んだときにはもう遅かった。

龍騎のファイナルベントが決まり、そしてカブトのライダーキックも決まった。

そのあと剣の攻撃、アギトの攻撃も決まった……。そのままキラは爆発……。倒されてしまった。

剣「よっしゃあー!!」

アギト「騒ぐな。早く向こうへ行くぞ。」

剣「あだっ！ 痛ってえー!!」

その倒された後の残骸をラガは呆然と見ていた。

キラはラガにとって、ここに連れてこられたときからのたった一人の仲間であり……。相棒だった。

その片割れが消えた今……。

ラガの中で何かが壊れる音がした。

がらがらと崩れ落ちていく何か……。

それに気づいたときにはもう彼の中には何も残ってはいなかった。

残っているものとしたら……

『破壊』

という二文字だけ……。

その様子に気づいたのは大首領と戦っているはずの士だった。

DCD「……。？！おい……。！お前らラガから離れろ！！できるだけ遠くに！！」

D・DCD「……。ほう。あいつらもなかなかやるな。あのキラを倒し……。そしてラガを本気にさせるとは。」

だがその声はなかなか届かない。

士と大首領は海東たちからだいぶ離れていたからだ。

DCD「くそっ！」

D・DCD「お前も向こうばかり気にしていてもいいのか？」

DCD「……ぐあっ……！」

大首領は土の腹を思い切り蹴る。

土は避け切れず、そのまま壁に吹き飛ばされる。

DCD「ごほっ！…くっ…！」

D・DCD「お前は我だけを見ていればいい。他に目を向ける余裕などないはずだからな。」

海東は咄嗟にやばいと思った。
勿論ラガの様子を見て、である。

DED「…やばいかもしれない」

クウガ「どういうことだよ。」

DED「この人数でも今の彼に勝てる気がしない。」

アギト「まさか…9人もいるんだぞ…。」

キバ「あれが本当のラガ…ということですね…。」

剣「…どっか変わったのか？」

龍騎「さあ…。」

ユウスケも海東と同じくラガの様子が変わったことに気付いていた。
彼もまた「究極の闇」という力を抱えている。

もしこの力を使えば…ラガを止める、倒すこともできるかもしれない。

キバ「…ユウスケ？」

クウガ「…俺がラガを倒す。」

DED「…君は僕が言ったことを聞いていなかったのかい？全員で

戦っても無理なんだ。」

クウガ「だけどクウガの力を使えば倒せるかもしれないだろ？」

ユウスケは仮面の下で笑顔を見せていた。

DED「まさか…究極の闇を…？」

クウガ「それで倒せるなら…それで士たちが救われるなら…俺は究極の闇にもなる…！」

DED「だめだ！その力を使えば…自分が持てなくなる…！」

クウガ「海東…。俺がもし士たちを倒そうとした時はそのまま倒してくれ…。」

キバ「ユウスケ…！やめて！」

アギト「お前がその気なら俺だって…！」

クウガ「シヨウイチさんが死んだらあねさんが悲しむから…。」

カブト「本気なんだな。」

クウガ「…はい。」

カブト「後のことは任せる。士だってそう言うはずだ。」

龍騎「ソウジさん…?!」

ソウジはユウスケの熱意を見て判断した。

きつと彼も一度決めたことは曲げない男なのだろう。

そうつところは士とよく似ている…。

カブト「行つて来い。」

ユウスケは頷くと、ラガの方へと走って行った。

DED「なぜ行かせたんだ…！」

海東は理解できなかった。ソウジの行動が、言動が。

カブト「士と長く一緒にいる君なら分かると思ったんだけどな。」
DED「わからないな。」

海東はユウスケが向かって行った方向を見つめながら呟いた。

その頃ユウスケは「究極の闇」仮面ライダーダークウガ アルティメットフォームの姿となり、ラガと戦っていた……。

To be continue…

第十七話 究極の闇（後書き）

もう終わりが見えてきています。

次回、UクウガVSラガがメインとなります。

もう描写がめちゃくちゃになる可能性大ですが・・・
とりあえずがんばりますね！

今日ももう1話更新できるといいなあと思っ
ています（笑）

世界を破壊し、世界を繋げ！！

第十八話 UクウガVSラガ（前書き）

やばいなあ…

こんな展開にしてよかったのか…

書いてて思います…。

それでは第十八話お楽しみください。

第十八話 UクウガVSラガ

温和なユウスケが今ではギラギラしている。

もうすでに自我はない。

ただ何かを壊したい。そんな衝動に駆られているユウスケ…。

ラガもまた同じだ。

その二人が対峙している。

仮面の下でにやりと笑ったように感じた。

そしてお互い近くへと駆け出す…。

そのまま殴り合いが始まった…。

ほかのライダー達は見ているだけしかできない。それがもどかしい…。

助けたい…。だが助けたら…。

海東が一番悩みに悩んでいた。どうすればいいのか、と。

DED「…くそ…。」

木の陰から見つめている夏海は何がおきているのかわからなかった。いきなりユウスケ―クウガ―が真っ黒のオーラに包まれていって、体も黒くなった。

ラガもいきなり変貌して…。

夏海も見ていることしかできない人間だ。

だからこそ…。何もおきてほしくない…。ユウスケの身に何か起こるようなことがあったら…。そのときは…。

夏海「どうなっちゃうんですか…。ユウスケ…。！」

アルティメットクウガ（ウクウガ）もラガも殴り合いを続けていた。ただ殴る。ただ目の前にいる『物体』を壊すことだけを目的として。もうすでに自我のない二人はどちらかが倒れるまで殴り合いを続けるだろう。

こんな喧嘩のような戦いはライダーVS大シヨッカーとは到底いえないようなものであるう。

ウクウガ「ウアア！！」

キラ「ウガッ！！グアアア！！」

ウクウガ「グアッ！」

殴られれば殴り返し、また殴られれば殴り返す。その繰り返し。

その力も半端ない力で。一発を受けるたびに相当なダメージを受けている。

そのため、彼らの体はもうぼろぼろだった。

ぼろぼろでもどちらかが倒れるまで殴り合いは続く。

動きが鈍くなっても・・・殴る。

ワタルやカズマは早くこの戦いをやめさせたかった。

見ていられない・・・！はやくユウスケを助きたい・・・。

でもこの願いは届かない。

自我がない彼らに近づけば何をされるかわからないからだ。

そのことをここににいる誰もがわかることだった。

ウクウガ「ウアアアア！！！！」

ラガ「ライダアア！！！！タオスウアアア！！！！」

ウクウガ「グアアッ！！ハアアア！！！！」

キバ「こんな戦い見ていられないですよ・・・。」

響鬼「でも僕たちが行ったら僕たちもあの戦いに巻き込まれます！」

今の二人に自我はありません。誰が味方で誰が敵か。それを判断することもできないんです……。むやみに僕たちが行けば僕たちが傷つくことになります。そしてユウスケさんが自我を取り戻したときに、傷ついた僕たちを見たらどう思いますか……。？」

キバ「……。っ！」

響鬼「間違いなく心の傷を負います。それも深い……。」

剣「でも……。でも……。！はやく終わらせないと……。っ……。っ！」

カズマはその後の言葉を言うのをためらった。

『ユウスケが死んでしまう。』

この一言を言ってしまったら……。絶対に夏海はショックを受ける。もちろん俺たちも。

そして大首領と戦っている土も……。

剣「もういやだ……。！もうやめてくれよ……。！ユウスケ……」

「

ウクウガ「ウガアアアア！……！」

ラガ「ウアアアアアア！……！」

もうぼろぼろだ。

きつともつすぐどちらかが倒れる。

それが……。ユウスケではないことに祈りながら。

するとどうだろう。

ウクウガの目が赤くなっただではないか。

つまり、自我を取り戻したのである。

ウクウガ「……。！俺は……。！」

ユウスケ「・・・な、夏海ちゃん・・・泣かないで・・・俺、夏海ちゃんに笑顔が似合うと思うから・・・ね？」

夏海「でも・・・ユウスケが・・・!!」

DED「小野寺君・・・。」

ユウスケ「夏海ちゃん・・・海東・・・みんな・・・土のこと、頼むな。あいつ・・・ああ見えて・・・人一倍・・・寂しがり屋だからさあ・・・。」

キバ「頼む・・・って・・・! そんなこと言うな・・・ユウスケ!!」

剣「ユウスケ!!」

アギト「おい!! しっかりしろ!!」

カブト「・・・だめだ。この変身ベルト・・・完全に壊れている。」
響鬼「どうしようもないってことですか・・・?! いやです・・・

! こんな・・・!!」

555「ユウスケさん・・・!!」

龍騎「ユウスケさん!!!!」

海東は黙り込んでいた。

こんな結末・・・ない・・・。

こんな結末が待っているのなら・・・この世界に長居するべきではなかった。

士を説得してまでも・・・この世界から離れるべきだったんだ・・・。

ユウスケ「海東・・・土のこと・・・夏海ちゃんのこと。よろしく・・・。」

DED「そんなことを言うのなら自分でやればいいだろう・・・?

! 僕は人から命令されるのが一番嫌いなんだ・・・!」

ユウスケ「はは・・・海東らしい言葉・・・だな・・・。」

夏海「いやです!! ユウスケ・・・!!」

ユウスケ「土と出会えて・・・夏海ちゃんと出会えて幸せだった旅・・・楽しかった・・・」

ユウスケはゆっくりと笑うように目を閉じた・・・。

夏海「ユウスケ・・・！いやあああ！！！！！！」
DED「・・・っ・・・！！」

一方土は大首領と必死で戦っていた。

ユウスケの『死』を知らされないまま。

そして戦いは終わりを迎えようとしていた・・・。

T o b e c o n t i n u e ...

第十八話 UクウガVSラガ（後書き）

本当に申し訳ないことをしましたorz

自分でもこの展開でいいのか、本当に迷いましたが、
こうすることになりました。

「怪盗と破壊者」という物語は比較的重い話になりそうですね。
でも最後の最後で、大どんでん返しが・・・

あるかもしれませんよ（↑）

それでは次回お会いしましょう！

次回の最後で、次回作の話をしようと思ってます。

世界を破壊し、世界を繋げ！

第十九話 戦いの終わり、そして・・・。（前書き）

ようやく闘いの描写が終わります・・・。

というか、この小説も後これを合わせて2話で完結です。
今週中には完結できそうですね。よかった！

それでは第十九話お楽しみください。

わかんと思いますが、一応説明を・・・。

（D・D C D ダークデイケイド）

（D C D / C - D C D デイケイド、コンプリートフォームデイケイド）

第十九話 戦いの終わり、そして・・・

士は「ユウスケー!!」という叫び声を聞いていた。

何かあったのかもしれない。しかし他のことを考えている余裕が士にはなかった。

というより、他のことを考えさせてくれる時間を大首領は用意していないのだ。

D・D C D「気になるだろう? 向こうのことが。」

D C D「大体わかつている。」

D・D C D「ほう。ならば動揺の一つか二つしているはずだな。」

D C D「動揺する余裕なんかないんだろ?!!」

「ATTACK RIDE SLASH!!」

この短時間で士は大首領の弱点を見極めようとしている。

今のところはすぎがない。どこを見てもぼろがでない。自分とは大違いだ。

自分はすぐに動揺する。すぐに焦ってしまう。

同じ人間でもこうも違うものなのか。

D・D C D「我とお前はこんなにも違うのか、と考えているな。」

D C D「それがどうした。」

D・D C D「当たり前だろう。お前は仲間などというなれ合いの中でここまで来た。我はキラヤラガという主従関係だけだ。仲間などというなれ合いの中で来たわけではない。この時点で大きく違う、というわけだ。」

D C D「なるほどな。でももうお前を守ってくれる奴は誰もいない

みたいだぜ。」

D・D・C・D「我は一人でも勝てる。お前を再起不能にすることくらいやすい。」

D・C・D「そうかよ!!!」

そのまま士は剣を使って斬りかかるが、押し止められてしまう。
士は舌打ちをした。

D・D・C・D「何をやってもお前は我に傷を付けることはできない。」
D・C・D「それはどうかな。」

「K U U G A A G I T O R Y U K I F I Z E B R A D E
H I B I K I K A B U T O
D E N - O K I V A F I N A L K A M E N R I D E D
E C A D E ! !」

士はコンプリートフォームへと変身した。
大首領は少しだけ反応する。

C・D・C・D「お前にはこの力はないはずだ。」

D・D・C・D「確かにないな。」

C・D・C・D「これはお前が軽視する仲間を得て手に入れた力だ。仲間の力で俺は最強の力を手に入れることができた!」

デイクエイドの力はライダーの力があってこそ、成り立つライダーである。

他のライダーに変身し、その力を使う。

士はその力を取り戻すために旅に出た。

いくつもの世界を巡り、それぞれの世界でライダーの力を取り戻した。

その世界で士は多くの仲間を作った。

仲間を作ったおかげで、今、ここにライダー達が集結しているのだ。

C・D C D「俺は負けない。絶対にな!!」

D・D C D「やってみろ!」

海東は士の様子を気にかけていた。

勿論目の前にいる夏海の状態も気になる。

ユウスケは大事な仲間だったから…。

ワタル「海東さん。士さんの戦況は…」

海東「遠くてよくわからないけど…。コンプリートフォームを出したのは正解だろうね。」

シヨウイチ「俺は門矢が押しているように見えるな。」

夏海も涙を浮かべながら、士の方に目を向けていた…。

士は既に大首領の弱みを見切っていた。

自分の体も限界が近かったから、早めに倒したい…そう考えていた。

D・D C D「くっ……仲間など必要ない!」

C・D C D「まだわからないのか…。相当お前は捻くれてるんだな。」

D・D C D「何が言いたいんだ!」

C・D C D「簡単だ。俺は仲間を作ったことによって変わった。夏海たちと出会う前、俺は一人で生きてきた。一人で十分だと思っていた。だが、それは違うんだ。それを俺は旅をしてわかった。俺の

この力も……。俺一人だけだったら手に入れることができなかったものだしな……。」

大首領は焦っていた。

焦っていたせいで、土の攻撃に反応できなかった。

D・D C D「くっ……。!!!!」

C・D C D「もう終わりにしようぜ。こんな戦い。」

D・D C D「いいのか……。?!俺が死んだらお前も消えるんだぞ?!!」

C・D C D「関係ないな。俺は今しなければいけないことをするだけだ。」

「FINAL ATTACK RIDE DECADE!!」

C・D C D「これで終わらせてやるぜ!!!!はああ!!!!!!」
D・D C D「させるか!!!!」

「FINAL ATTACK RIDE DARK DECADE
!!」

土は聞こえていた。

夏海や海東が叫んでいる声を。

自分の仲間も……。そしてユウスケの叫びも。

土「(それでも俺は……。やるしかないんだ……。!)」

《大爆発》

海東「士!!!!!!!!!!!!!!」
夏海「士くん!!!!!!!!!!!!!!」

To be continue...

第十九話 戦いの終わり、そして……。 (後書き)

ラストですね、次……。

なんとなく展開は読めると思いますが……。

ラストだけではなく、エピソードも読んでいただけるとうれしいです。

遅くとも土曜日には完結する予定でいます。

最後まで、よろしくお願いします。

さて、次回作なのですが……。

「オールライダーVS大ショッカー」を更新します。

ただいま執筆作業の真っ最中でして……。

もちろん映画の要素も取り入れ、自分なりの解釈も入れつつ、漫画版をベースに書いていこうと思っています。

こちらのほうも引き続き応援お願いします！

世界を破壊し、世界を繋げ！

最終話 消滅そして修復・・・（前書き）

エピソードが最終的なラストなので、

これはまだ最終話、とは言えないかもしれませんが。

でもとりあえず最終話、ということ・・・（笑

このような終わり方にしてごめんなさい・・・！

それでは、最終話をお楽しみください。

（ただし、エピソードが完全な最終回となります）

最終話 消滅そして修復・・・

爆発がおさまった時、目の前には果然と立っている土の姿があった。近くにはぼろぼろになっているディケイドライバーが落ちていた。何もかもが終わったのだ。

大ショッカー幹部を倒し・・・そして大首領も倒した。本当ならここでハッピーエンドのはずなのに・・・。

彼らの表情は暗い。これからの土の末路をわかっているからだ。

海東は土のもとへと急いだ。

海東「土・・・。」

土「・・・終わったな、全部。何もかも。」

海東「・・・ああ。」

土「何辛気臭い顔をしてるんだよ。海東らしくないぜ。」

これほど覚悟している人間が恐ろしいと思ったことはない。そう思った海東。

自分の世界を見つけるために旅をしていた土。世界を救うために旅をしてきた土や夏海やユウスケ。

しかし自分の世界を見つけることは出来なかった。

世界を救うことはできても、自分の世界だけは見つけられなかった。海東は思った。

自分の世界を見つける前に土は消えてしまうというのか・・・と。

土「いいんだ。これで。」

海東「何を言って・・・。」

土「俺の役目は世界を救うことだったんだからな。」

夏海「・・・そんなの嫌です!」

士「・・・夏海・・・。」

今まで黙っていた夏海が叫ぶ。

彼女もまた、士だけがいなくなることに疑問を抱いていた。

士は決して悪魔なんかじゃない。

ぶつきらばうでひねくれているけど、実は優しくてさみしがりで。誰よりも仲間思いの人なんだ・・・と。

夏海「どうして士くんだけが消えなくちゃいけないんですか?! さんのあんまりです! 酷いです! 士くんはただ・・・ただ世界を救いたかっただけなのに・・・。」

士「なあ・・・夏海。自分がいなくなりさえすれば世界は救われるって聞いたらどう思う?」

夏海「・・・そ、それは・・・。」

士「俺だつて最初は戸惑った。混乱もした。だがな、ナツミカン。動揺してたら何もできないんだ。俺にはしなければいけないことがある。それを果たすために俺は・・・大シヨッカーと、大首領と闘った。」

海東「・・・士。」

士「一人の犠牲も出したくはなかったが・・・な。」

夏海・海東「「?!」」

士はわかっていた。

ユウスケがラガとの戦いで命を落としてしまったことを。

だからこそ。この戦いを途中で投げ出すわけにはいかなかった。

自分が負けるわけにもいかなかった。

自分が負けたら・・・

士「・・・ユウスケ。」

海東「小野寺くんは最後まで士のことを案じていたよ。」

士「・・・あいつ・・・お人よしもいいとこだな。」

海東「それは士もそうだと思うけどな。」

士「そういう海東も、だろ？」

海東「不本意だけど・・・そうかもしれないな。」

海東の表情にも笑顔が見え始めていた。

他のライダー達も暗くなっている様子がない、と思いはじめていた。

その矢先。

士の体が粒子化されてきていた。

士「・・・そろそろ時間だな。」

海東「・・・！」

それに気づいた海東・・・ライダー達・・・そして夏海。

夏海は精いっぱい力を振り絞って士に抱きつく。

士「夏みかん・・・苦しい・・・。」

夏海「嫌です・・・！士くんを消えさせたりなんか絶対に・・・！」

士「・・・夏海・・・。」

夏海「嫌です・・・嫌・・・。」

海東は夏海を士から離させる。

それを拒む夏海。

その様子を少しさみしげに見つめる士。

士の体はもう半分くらい消滅しかけていた。

ワタル「士さん・・・僕たちは士さんのおかげでここまでこれました。」

タクミ「士さんがいたから今の僕がいます・・・。」

カズマ「土が俺に言ってくれなかったら・・・今のおれはなかった。」

シンジ「俺も・・・。」

ソウジ「みんな同じ思いだ。門矢。」

ショウイチ「・・・ああ。」

アスム「はい・・・！」

士「・・・そうか。」

士は満足したような表情をした。

そして夏海や海東に視線を向ける。

士「夏みかん。俺が消えたら世界は修復される。だからユウスケもちゃんと戻ってくる。」

夏海「・・・え？」

士「俺が原因でおこったものはすべて修復される、ってことだ。あ、勿論大シヨッカーは修復されないがな。」

夏海は士が言った「ユウスケが戻ってくる」という発言に反応する。
海東もぴくつと頬が動く。

士「だから安心しろ。な？」

消滅していく腕を夏海の体に持つていこうとしている士。
それを支える夏海と海東。周りには仲間となったライダー達。

夏海の頭をなで、笑顔を見せる。

士「・・・なかなか楽しかったぜ。こんな旅も・・・な。」

そしてそのまま消滅した・・・。
あっけなかった。

世界は・・・

ディケイドが倒されたことによって
修復される・・・。

最終話 消滅そして修復・・・（後書き）

エピソードをお楽しみに。

としか言えません（笑

今日中にUPする予定ですが、

もしかしたら日をまたぐ可能性もあります・・・。

ご了承ください。

世界を破壊し、世界を繋げ！

エピソード リセットされた世界（前書き）

このエピソードの内容は入浴中に考えました（↑）
自分の中では気にいってるんだけどなー・・・
万人受けするかどうかは・・・疑問（↑）
とりあえず最後の最後です！お楽しみください！

エピソード リセットされた世界

士が消滅したと同時に、海東はある空間へと飛ばされていた。
真つ白の世界。その中にはものすごい量の本棚がある。

海東「ここは一体・・・？」

海東が歩いていくと目の前に男の子が立っていた。

海東「・・・誰だ？」

??「君こそ誰だい？ここは僕しか来られないはずだ。」

海東「・・・海東大樹。仮面ライダーディエンドさ。」

??「海東大樹。・・・ああ、世界のお宝を巡って旅をしているという・・・。そのお宝がどんなものか気になるよ。」

海東「・・・なんでそれを？」

??「僕はフィリップ。ここは地球の本棚^{ほし}さ。」

海東「『ほし』の本棚・・・？」

フィリップ「ああ。なぜ君がここにいいのかは疑問だけど・・・。」

本を探し始めるフィリップを見て、海東は最初に抱いた疑問をもう一度投げかける。

海東「なぜ僕はここにいる？そして君はなぜ僕のことを知っているんだい？」

フィリップ「なぜ・・・か。それは僕に聞かれても困る。それから僕は君のことを一度検索した。だから特に興味もない・・・。興味があることと言えば・・・。」

海東「興味がないとは心外だな・・・。」

フィリップが放った言葉に少しばかり傷つく海東。

しかし当の本人はお構いなしの様子で、何かを探しているようだ。

フィリップ「・・・あつた！」

海東「・・・なんなんだ、この少年は。」

フィリップ「ディケイド。破壊者・・・。君はこの意味がわかるかい？」

海東「世界の破壊者、仮面ライダーディケイドのことか？」

フィリップ「なるほど。世界の破壊者か・・・。」

海東「しかしもういない。」

フィリップ「・・・いない？」

海東「・・・消滅した。」

フィリップ「消滅?! ゾクゾクするねえ・・・。」

そのまま自分のことをフィリップと名乗った少年は地球の本棚の奥へと消えていった。

そして海東の意識は途切れる。

次に目覚めたとき。あたりは真っ暗だった。

海東「真っ白の次は真っ暗か・・・。」

夏海「大樹さん・・・?」

目の前には夏海の姿があった。

海東「ナツメロンか。」

夏海「ここは一体・・・?」

海東「世界と世界の狭間・・・と言ったほうがわかりやすいかな。」

夏海「世界と世界の狭間・・・？」

??「そう。ここは世界と世界の狭間。」

夏海・海東「「?!」」

いきなり後ろから声がした。驚きながら振り返る二人。そこには真っ白の服を着た青年が立っていた。

海東「・・・オリジナルの仮面ライダーキバ。紅渡か。」

渡「光栄ですね。僕のことを知っているなんて。」

夏海「あなたは・・・あの時の。」

渡「久しぶりです。光夏海さん。そして海東大樹。」

なぜ今ここに紅渡がいるのか、海東は理解ができずにいた。

もうディケイド・・・門矢士はいない。それなのに。

海東「何の用かな。もう君たちの目的であるディケイドはいないけど。」

渡「この世界は2人のディケイドの命と引き換えに救われました。

他の世界も。そのため消滅した世界や人間も元通りになりました。」

夏海「でも・・・でも士くんは・・・！」

そう。

他の世界は修復されても、仮面ライダーディケイド門矢士のみ復活できないのだ。

渡「・・・この後世界はリセットされます。」

夏海「・・・リセット・・・？」

渡「ええ。ループしているのです。」

海東「ループ・・・リセット・・・。記憶から今までのことがすべ

て消えるというわけか。」

夏海「そんな・・・。」

渡「夏海さんがディケイドに出会ってからの記憶がすべてなくなります。」

夏海「・・・土くんは・・・土くんも復活するってことですか?!」
渡「・・・。」

渡は何も言わないまま、その場から消えた。
そして海東達も意識を同時に手放した・・・。

リセットされた世界。

ここは後の「光夏海の世界」と呼ばれた世界である。

ここに一人の盗人・・・もとい、自称トレジャーハンターが降り立った。

彼の名は海東大樹。仮面ライダーディエンドになる男だ。

海東「さて。この世界のお宝は・・・と。・・・ん?」

海東の目の前にピンクのトイカメラをぶら下げた青年が立っていた。
自分をじつと見つめている。

海東「・・・何か僕に用でもあるのかい?」
?「別にない。」

海東「そう・・・。だったらなんでここにいるんだい?」

自分が来た時にはいなかった。
人が近づいてくる気配もしなかった。
なのになぜ・・・?

海東が首をかしげていると、

？「わからない。なんでここにいるのか。」

海東「・・・記憶喪失か。覚えていることはないの？」

？「・・・門矢士。自分の名前だけだ。」

海東「門矢士・・・か。」

士「ここはどこなんだ・・・？」

海東「・・・さあ。僕もわからないよ。今この世界に来たばかりだしね。まあ・・・わかってることとしたら・・・。」

士「・・・？」

海東が黙り込む。士はその様子を怪訝そうに見つめていた。

海東「君と僕はどこかで出会っているかもしれない、ということさ。」

士「・・・?!」

二人の物語は

これから始まる・・・。

F i n ! !

エピソード リセットされた世界（後書き）

遅くなってしまういごめんなさい・・・。

なかなか思うように進まず。そして最後の最後でこけました。

うーん・・・もう少し上手に書きたかったんですけどね・・・orz
とりあえず完結しました。

今日中に総括を書いて、この小説の終わりとさせていただきます。

次回作は前回言っていたように、

「オールライダーVS大ショッカー」です。

ぜひ、こちらにもお越しく下さい！

<http://ncode.syosetu.com/n44404p/>

それでは約1ヶ月間応援してください
ありがとうございました！

水城柳羅

総括 「怪盗と破壊者」について

今まで読んでくださった方、ありがとうございました。

一応前回のお話で完結、という形なのですが、番外編を書こうかな、なんて思っております。

その番外編は多分また違うブックで書くので、

ここは一応「完結作品」とさせていただきます。

ありがとうございます！

さて、「怪盗と破壊者」という作品についていろいろ書いていこうと思っているのですが・・・。

以前も申しあげましたように、この小説、ただの自己満から書き始めたものであります。

そのため文章もめちゃくちゃだし、設定もなかなか拾いきれていないところが

多々あるかな、と思っております。

時間ができる、2・3月の頃に編集できたらいいなーと考えています。

TV本編でもこの二人の関係性が深く描かれることってなかったんですよね。

そこがまた白倉Pのじらすところなのか・・・なんなのか・・・。ただめんどくさくて省いてしまったのか・・・わかりませんけど・・・。

でもなんとなくこの二人には何らかの関係性があると思ったんです。出会い方にしても。秘密っぽいところも。

それをこの小説ですべて明らかにしようじゃないか！と思って執筆作業に入っただんですが・・・。

あまりぬぐい切れていない気がします。そこはまあ自分の文章能力の低さが

原因なのですが……。

自分の中でこういう感じに進めていきたい、というものはある程度ありましたし、

最初の方は順調に進んでいったのですが……。

中盤くらいから訳が分からなくなってきた。スランプもあったりして。

ぶつちやけ最低な文章だな、と思っています。

前回の小説もそこまで上手に書けたとは思っていませんが、それ以下です。

うう……やっぱりこういう戦闘シーンが多い小説は私には向かないんでしょうか。

他の方が書いているディケイド小説はあまり注目して読まないようにしています。

たまに目にしたものと、やはりすごいなあ、と思ってしまいます。

自分の中ですつきりしないというか。ここで終わっていいのか、という気持ちはあります。

でもこれ以上進めると本当に危ないものになってしまうのでは、と思うので

とりあえずここでこの小説はきります。

新しい小説も始まっているので……。ごめんなさい。

編集作業は来年2、3月の間にしたいと思っています。

内容が著しく変わる可能性もないとは言いきれませんが、最終的な終着点は同じにしますよ。勿論。

中盤のこちゃこちゃしたところを直すのが目的なので。

こんなごちゃごちゃした小説を最後まで読んでくださった方がいるのかどうかは

物凄く疑問ですが、もし読んでくださった方がいるとすれば・・・。
ありがとうございます！

としか言いようがありません・・・（笑）

そしてこれからも末長くお付き合いくださるとうれしいです。

それでは、次回作でまたお会いできることを・・・！

本当にありがとうございます！！

水城柳羅

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8919o/>

仮面ライダーディケイド 怪盗と破壊者

2010年12月14日17時25分発行